

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第228集

# 国指定史跡 銚子塚古墳附丸山塚古墳

—史跡整備事業に伴う平成16年度発掘調査概要報告書—

2005年3月

山梨県教育委員会

# 国指定史跡 銚子塚古墳附丸山塚古墳

—史跡整備事業に伴う平成16年度発掘調査概要報告書—

2005年3月

山梨県教育委員会



## 序

国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳は、昭和58～62年度に保存整備事業が実施され、甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園を訪れる県内外の皆様に親しまれています。しかし、銚子塚古墳の保存整備事業は、史跡指定地全体を対象としたものではなかったため、山梨県教育委員会では昭和62年度以降も指定地内の地権者の皆様のご理解とご協力を得ながら、史跡土地公有地化事業を進めて参りました。その結果、平成16年度までに銚子塚古墳の後円部周辺および前方部北東側を主とする部分の公有地化が進み、平成17年度以降に追加の保存整備を計画するまでに至りました。今回の発掘調査は、追加実施する保存整備事業をより正確なものとする、基礎的な資料を得るために山梨県埋蔵文化財センターが実施したものです。発掘調査の主たる目的は、墳丘および周溝の範囲と規模を把握することになりましたが、「突出部」や「周溝区画堤」の発見、葬送等に関わる可能性の高い木製品類の発見など、これまで知られていないかった銚子塚古墳に関わる新しい情報を得る結果となりました。調査成果の一端については、当センターのホームページやマスコミ報道等で広く知っていたいきとともに、平成17年1月22日に開催いたしました現地見学会では、300名を越える皆様に直接ご見学させていただいたところです。今回の発掘調査の詳細な内容・成果につきましては、平成17年度以降に本報告書が刊行されることとなっておりますが、調査成果の重要性に鑑み、迅速な公開を目的とした概要報告書をここに発行させていただくこととなりました。概要報告書をご覧いただき、本報告書作成および整備事業実施に向けて多くの皆様からのご指導・ご助言をお願いする次第です。

最後となりましたが、今回の発掘調査にご理解、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げ、序文といたします。

平成17年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 渡辺 誠

## 例　　言

1 本書は、山梨県東八代郡中道町下曾根所在の国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の史跡整備事業（国庫補助事業）に伴う平成16年度発掘調査の概要報告書である。なお、今回の整備・発掘調査は銚子塚古墳に限定される。

2 発掘調査に係る事務手続書きは下記のとおりである。

平成16年8月 山梨県教育委員会教育長より現状変更許可申請を文化庁長官に提出

平成16年9月 文化庁長官事務代理文化庁次長より現状変更許可（16委序財第4の809号）

平成17年2月 埋蔵文化財発見届を南甲府警察署長に提出

平成17年3月 山梨県教育委員会教育長より現状変更完了報告を文化庁長官に提出

3 発掘調査は、山梨県教育委員会が主体となり、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

4 発掘調査は、平成16年9月21日～同年11月5日および平成17年1月11日～2月5日まで実施した。

5 本書の執筆・編集は、森原明廣・森屋文子（山梨県埋蔵文化財センター資料普及課）が担当した。

6 発掘調査に係る図面・写真等の諸記録および出土遺物は山梨県埋蔵文化財センターで保管している。

7 発掘調査に係る調査組織は以下のとおりである。

調査主体 山梨県教育委員会

調整部局 山梨県教育委員会学術文化財課

調査組織 山梨県埋蔵文化財センター

所長 渡辺 誠

次長 山崎 義雄

次長 末木 健

調査研究課長 坂本 美夫

資料普及課長 八巻志夫

第2担当リーダー 山本 茂樹

森原 明廣

森屋 文子

発掘調査参加者 赤池 浩、荒川公子、荒川奈津江、岩下修二、佐藤武光、土屋美保子、

手塚房子、東條幹雄、中澤久雄、長谷部久樹、村田勝利、矢崎 緑

7 発掘調査および概要報告書作成にあたり多くの方々からご教示をいただいた。

御芳名を記し感謝申し上げる。

赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）、石野博信（徳島文理大学）、一瀬和夫（大阪府教育委員会）、今村峯雄（国立歴史民俗博物館）、稲村繁（横須賀市博物館）、魚津知克（大手前大学史学研究所）、植田文雄（滋賀県能登川町教育委員会）、大塚初重（明治大学名誉教授）、岡村道雄（奈良文化財研究所）、柏木善治（かながわ考古学財团）、忽那敬三（明治大学博物館）、小林謙一（国立歴史民俗博物館）、高橋美久二（滋賀県立大学）、立花 実（神奈川県伊勢原市教育委員会）、寺沢 薫（奈良県教育委員会）、中井正幸（岐阜県大垣市教育委員会）、中司照世（福井県埋蔵文化財調査センター）、山梨県中道町教育委員会、名取 潤（山梨県森林総合研究所）、西川修一（神奈川県立中沢高等学校）、畠 大介（帝京大学山梨文化財研究所）、服部敬史（東京家政学院大学）、土生田純之（専修大学）、林部 光（山梨県中道町教育委員会）、平野 修（帝京大学山梨文化財研究所）、広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）、北篠芳隆（東海大学）、丸山 正（独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センター）、光谷拓実（独立行政法人奈良文化財研究所）、宮澤公雄（帝京大学山梨文化財研究所）、山田昌久（東京都立大学）  
（順不同 敬称略）

8 本書に掲載した構造図や全体図には、日本測地系2000に基づく第Ⅶ系座標（X・Y）を示した。なお、第Ⅶ系原点は東経138° 30' 0"、北緯36° 0' 0"であり、新潟県・長野県・山梨県・静岡県に適用される。

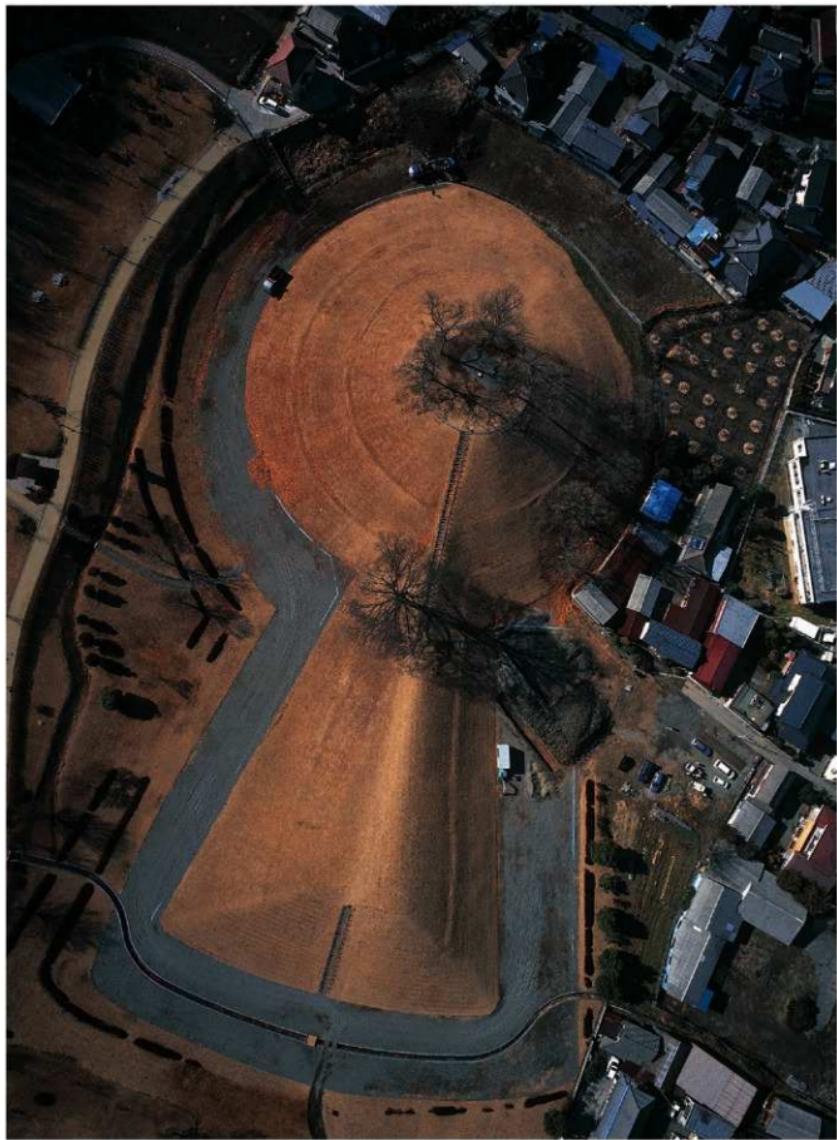
# 目 次

## 序文・例言

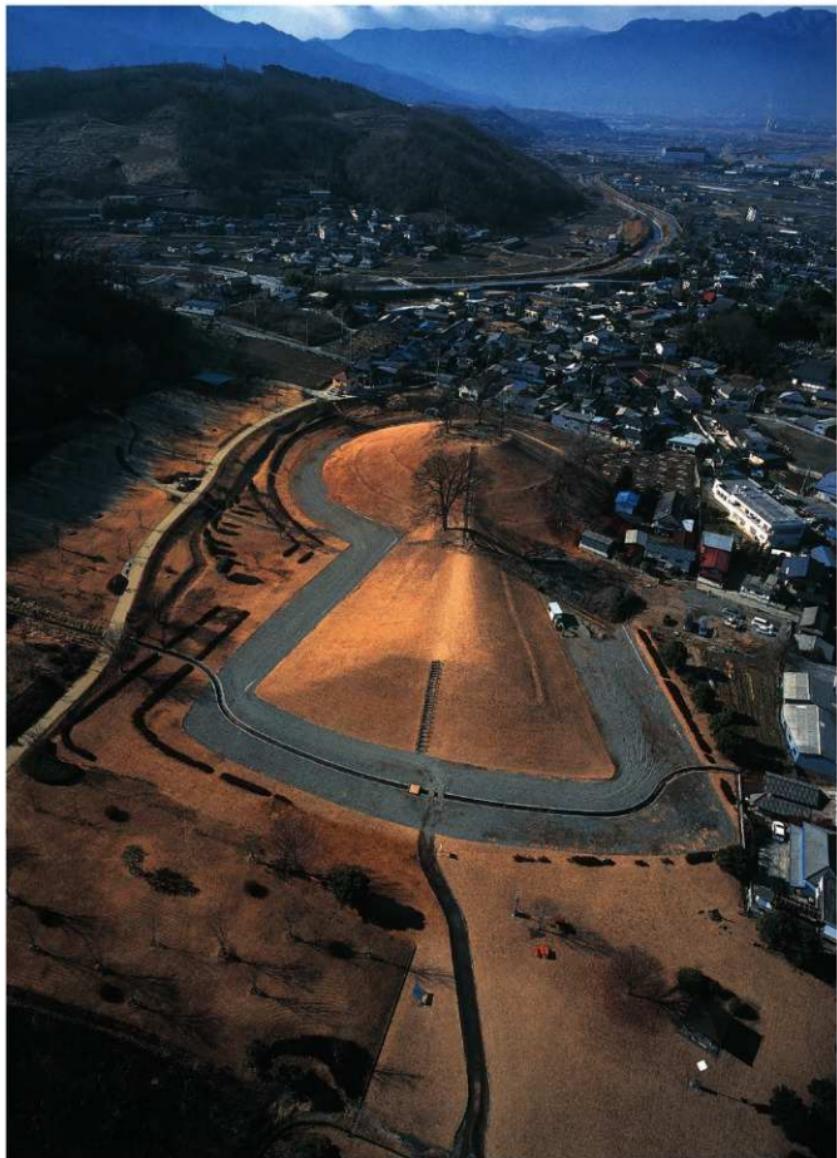
### カラー図版

カラー図 1	銚子塚古墳の俯瞰全景（東から）	1
カラー図 2	銚子塚古墳の鳥瞰全景（東から）	2
カラー図 3	第5-1号トレンチ全景（北から）	3
カラー図 4	第5-1号トレンチ墳端の状況（北東から）	3
カラー図 5	第5-1号トレンチ笠形木製品出土状況（南東から）	3
カラー図 6	第6-1号トレンチ 突出部検出状況（西から）	4
カラー図 7	第6-1号トレンチ 突出部検出状況（北東から）	5
カラー図 8	第6-1号トレンチ 突出部検出状況（東から）	5
カラー図 9	第7-1号トレンチ及び第7-2号トレンチ（東から）	6
カラー図 10	第7-1号トレンチ 周溝区画堤検出状況（南東から）	6
カラー図 11	第7-2号トレンチ 周溝区画堤検出状況（西から）	6
カラー図 12	第8号トレンチ 自然木出土状況（北東から）	7
カラー図 13	第8号トレンチ 墳端の状況（北東から）	7
カラー図 14	第8号トレンチ 周溝外端の遺物出土状況（東から）	7
カラー図 15	第10号トレンチ 木柱検出状況（南西から）	8
カラー図 16	第10号トレンチ 木柱埋設状況（南から）	9
カラー図 17	木柱（長さ90cm・最大幅20cm）	9
カラー図 18-①	木柱下端面	9
カラー図 18-②	木柱上端面	9
カラー図 19	第10号トレンチ 木柱埋設状況（南から）	10
カラー図 20	第10号トレンチ 木柱と後円部墳丘（南西から）	10
カラー図 21	第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（北から）	11
カラー図 22	第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（東から）	12
カラー図 23	第10号トレンチ 木柱・木製品・後円部墳丘（西から）	12
カラー図 24	第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（北西から）	13
カラー図 25	第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（北から）	13
カラー図 26	第5-1号・第8号・第9号トレンチ出土の埴輪	14
カラー図 27	第10号トレンチ出土の埴輪	14
カラー図 28	第8号トレンチ出土のS字状口縁台付甕形土器	15
カラー図 29	第5-1号トレンチ出土の笠形木製品（上面）	15
カラー図 30	第5-1号トレンチ出土の笠形木製品（下面）	15
カラー図 31	第8号トレンチ出土木製品	15
カラー図 32	第10号トレンチ 木柱周辺出土の木製品	15
カラー図 33	第10号トレンチ南拡張区出土の木製品群	16
カラー図 34	円盤状木製品と刀剣状木製品	16
カラー図 35	円盤状木製品に差し込まれた木製目釘	16
カラー図 36-①	第10号トレンチ14層出土の木製品	16
カラー図 36-②	ヘラ状木製品	16
<b>本 文</b>		
I	平成16年度事業の概要	19
II	銚子塚古墳の概要	21
III	平成16年度の発掘調査の概要	23

IV 平成16年度出土遺物の概要	38
V あとがき	41
本文図版	
図1 銚子塚古墳全体図（1／800）	17～18
図2 整備された銚子塚古墳（東から）	19
図3 設置した整備事業告知板	19
図4 平成16年度試掘坑配置図	19
図5 後円部墳丘の調査風景	20
図6 第10号トレンチ調査風景	20
図7 現地見学会	20
図8 銚子塚古墳と出土品	21
図9 銚子塚古墳の位置と周辺の遺跡	22
図10 第2号トレンチ（北東から）	23
図11 第3号トレンチ調査風景	23
図12 第2号トレンチ平面図・断面図	23
図13 第5－1号・5－2号トレンチ平面図・断面図	24
図14 第5－2号トレンチ周溝外端の状況（南西から）	24
図15 第6－1号トレンチ 突出部の礫の出土状況（北西から）	25
図16 第6－1号トレンチ 突出部の礫の出土状況（南東から）	25
図17 第6－1号トレンチ 突出部の礫の出土状況（南西から）	25
図18 第6－1号トレンチ平面図・断面図	26
図19 第7－1号・7－2号トレンチ平面図・断面図	27
図20 第7－1号トレンチ 階段状になる周溝底面（東から）	28
図21 第7－1号トレンチ 突出部からつづく幅の広い平坦面（西から）	28
図22 第7－1号トレンチ 畦間に伴う石積（南東から）	28
図23 第8号トレンチ平面図・断面図	29
図24 第8号トレンチ墳端状況（北西から）	30
図25 第8号トレンチ周溝外端の土層堆積状況（東から）	30
図26 第9号トレンチ墳端の状況（北東から）	30
図27 第9－1号・9－2号平面図・断面図	31
図28 第10号トレンチ平面図・断面図	32
図29 第10号トレンチ調査前風景（南西から）	33
図30 第10号トレンチ作業風景（南から）	33
図31 第10号トレンチ木柱周辺の土層体積状況（南から）	33
図32～41 木柱①～木柱⑩	34
図42 第10号トレンチ木製品の出土状況	35
図43 第10号トレンチ南拡張区サブトレンチ（北西から）	36
図44 第10号トレンチ南拡張区サブトレンチ内出土の木製品（北から）	36
図45 第12号トレンチ平面図・断面図	37
図46 後円部南側の傾斜面（北東から）	37
図47 第12号トレンチ	37
図48 第8号トレンチ出土のS字甕	38
図49 カラー図26・27で図示した埴輪	39
図50 トレンチ埋め戻し	40
図51 調査終了後（北西から）	40
図52 銚子塚古墳断面図	41



カラー図1 銚子塚古墳の俯瞰全景（東から）



カラー図2 銚子塚古墳の鳥瞰全景（東から）



カラー図3 第5-1号トレンチ全景（北から）



カラー図4 第5-1号トレンチ墳端の状況（北東から）



カラー図5 第5-1号トレンチ笠形木製品出土状況（南東から）



カラー図6 第6-1号トレンチ 突出部検出状況（西から）



カラー図7 第6-1号トレンチ 突出部検出状況（北東から）



カラー図8 第6-1号トレンチ 突出部検出状況（東から）



カラー図9 第7-1号トレンチ及び第7-2号トレンチ（東から）



カラー図10  
第7-1号トレンチ  
周溝区画  
堤査出状況  
(南東から)



カラー図11  
第7-2号トレンチ  
周溝区画  
堤査出状況  
(西から)



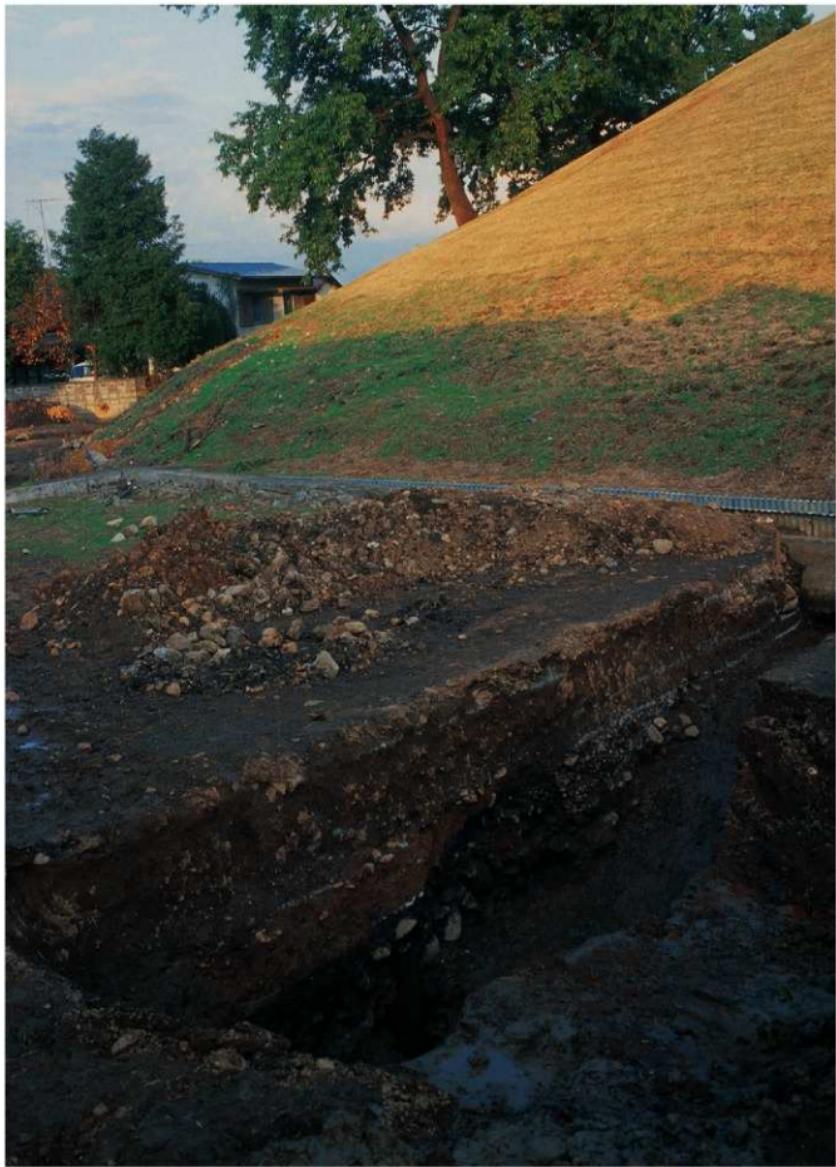
カラー図12 第8号トレンチ 自然木出土状況（北東から）



カラー図13 第8号トレンチ  
墳端の状況（北東から）



カラー図14 第8号トレンチ  
周溝外端の遺物出土状況（東から）



カラー図15 第10号トレンチ 木柱検出状況（南西から）



カラー図16 第10号トレンチ 木柱埋設状況（南から）



カラー図17 木柱（長さ90cm・  
最大幅20cm）



カラー図18-①  
木柱下端面



カラー図18-②  
木柱上端面



カラー図19 第10号トレンチ 木柱埋設状況（南から）



カラー図20 第10号トレンチ 木柱と後円部墳丘（南西から）



カラー図21 第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（北から）



カラー図22 第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（東から）



カラー図23 第10号トレンチ 木柱・木製品・後円部填丘（西から）



カラー図24 第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（北西から）



カラー図25 第10号トレンチ南拡張区 木製品出土状況（北から）



カラー図26 第5—1号・第8号・第9号トレンチ出土の埴輪



カラー図27 第10号トレンチ出土の埴輪



カラー図28 第8号トレンチ出土のS字状口縁台付甕形土器



カラー図29 第5-1号トレンチ出土の笠形木製品  
(上面)

カラー図30 第5-1号トレンチ出土の笠形木製品  
(下面)



カラー図31 第8号トレンチ出土木製品



カラー図32 第10号トレンチ 木柱周辺出土の木製品



カラー図33 第10号トレンチ南拡張区出土の木製品群



カラー図34 円盤状木製品と刀剣状木製品



カラー図35 円盤状木製品に差し込まれた木製目釘



カラー図36-① 第10号トレンチ14層出土の木製品



カラー図36-② ヘラ状木製品

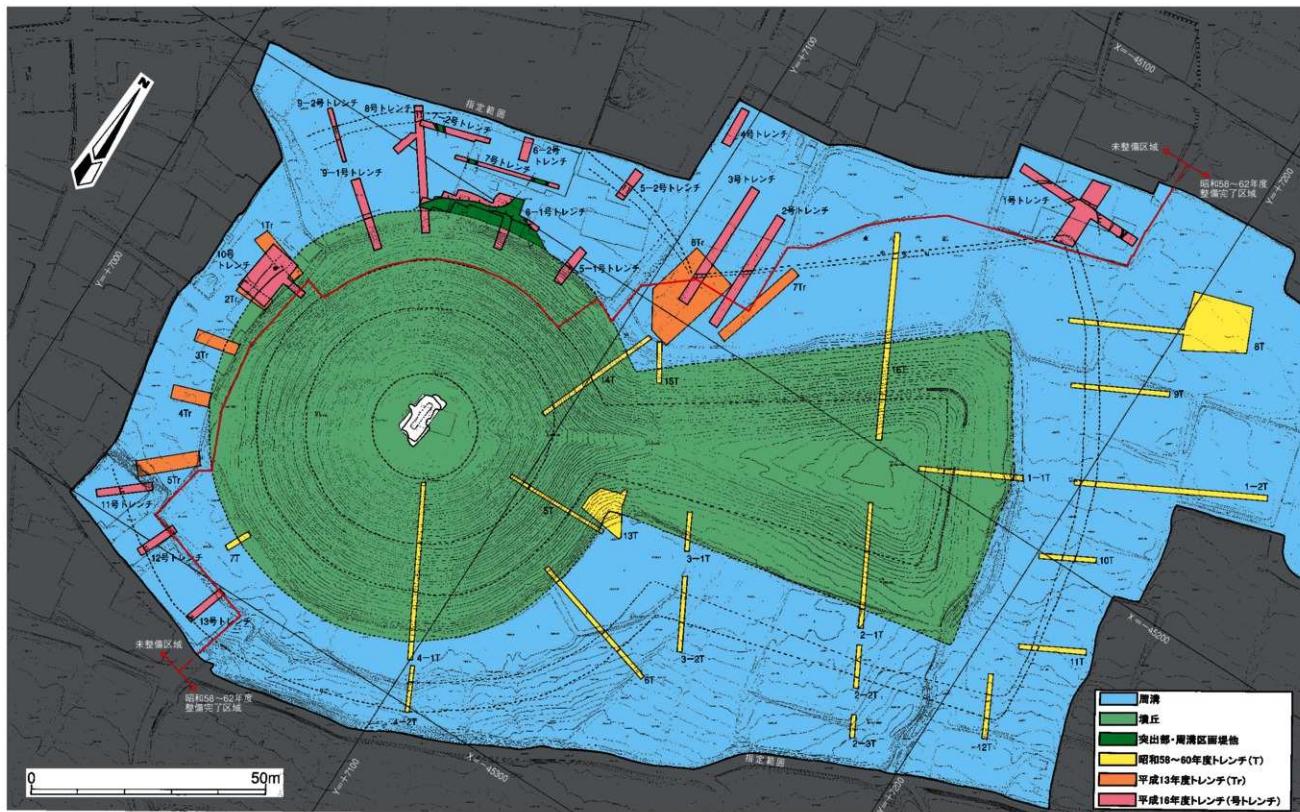


図 1 銚子塚古墳全体図 (1/800)

# I. 平成16年度事業の概要

## I-1. 調査に至る経緯と経過

銚子塚古墳については、昭和5（1930）年に「銚子塚古墳附丸山塚古墳」として国史跡に指定されて以来、約半世紀を経過した昭和51（1976）年に史跡公園として整備する計画が山梨県によって開始された。その後、昭和52～53年度には保存整備のための公有地化が図られ、昭和58（1983）年から昭和60（1985）年には整備のための発掘調査が県教育委員会により実施された<sup>1)</sup>。この調査成果を基礎として、昭和61（1986）年から史跡整備工事が開始され、昭和63（1988）年には後円部周溝の一部ほかを除いた部分の整備を完了するに至った。

以降、銚子塚古墳は甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園内にある古墳として広く活用されてきたが、後円部周辺には先の整備工事で対象外となった民有地が残存し、古墳を全周して見学することが不可能な状態にあった。そこで県教育委員会では、昭和62年度以降、銚子塚古墳周辺の史跡指定地の早期公有地化を推進し、平成16年度までに周溝部に該当する箇所の公有地化をほぼ完了した。なお、公有地化完了部分については、迅速な整備事業実施に向けての取り組みが図られ、すでに平成13年度には括れ部北側や後円部西側を対象とした発掘調査が県埋蔵文化財センターによって実施され、後円部西側の埴丘端部を確認するなどの調査成果が得られている<sup>2)</sup>。

今回の発掘調査は、この平成13年度調査の延長上にあるものであり、平成13年度以降に公有地化が完了した箇所を主たる調査対象としながら、史跡整備のための基礎資料が不足する部分についての調査も同時に実施した。なお、今回の発掘調査では対象面積は約5,000m<sup>2</sup>に対して、第1号トレンチから第13号トレンチまでの計13箇所（トレンチ本数では17本）の試掘坑を設定し、対象面積の約13%となる約650m<sup>2</sup>を発掘調査した。発掘調査については、国史跡の現状変更許可を得て実施し、その旨を表示した告知板を公園内各所に設置してから実施した。また、公園内への告知板設置や調査用仮設建物の設置については、山梨県知事から都市公園占用許可を得た上で施工した。

註1 山梨県教育委員会 1988年  
『国指定史跡銚子塚古墳附  
丸山塚古墳－保存整備事業  
報告書』

註2 山梨県教育委員会 2002年  
『国指定史跡銚子塚古墳附  
丸山塚古墳－史跡整備事業  
に伴う発掘調査報告書』



図2 整備された銚子塚古墳（東から）



図3 設置した整備事業告知板

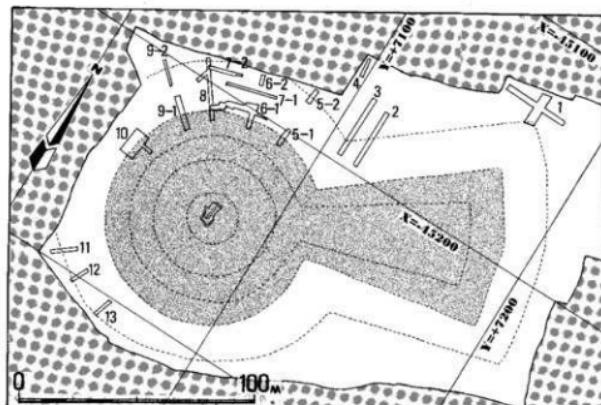


図4 平成16年度試掘坑配置図

## I-2. 平成16年度発掘調査の経過

平成16年度の発掘調査は、土地公有地化事業と一部同時進行であったため、その進捗状況に合わせ秋季と冬季の2期に分割して実施した。秋季（平成16年度第1期）調査については、平成16（2004）年9月21日より調査作業を開始し、第1号・2号・3号・4号・8号・9-1号・9-2号・10号・11号・12号・13号の各トレーニチを調査・記録し、同年11月5日までに一旦終了した。また、冬季調査（平成16年度第2期）については、平成17年（2005）年1月11日より作業を開始し、第5-1号、5-2号、6-1号、6-2号、7-1号、7-2号、第10号の各トレーニチを調査・記録し、同年2月5日に終了した。なお、第10号トレーニチについては、秋季調査時に立柱状態で土坑内に埋設された木柱が検出されたことから、冬季調査においてその性格究明を目的に拡張調査を行なったために重複が生じている。すべての試掘坑は必要最低限の掘り下げ調査に留めるよう努め、調査後は土表で遺構面を保護・養生した上で埋め戻した。以下、調査経過を略記する。



図5 後円部墳丘の調査風景

平成16年9月21日	秋季（第1期）調査を開始
平成16年9月24日	第1号トレーニチ（前方部北東側）の調査に着手
平成16年9月28日	第2号トレーニチ（北側括れ部周溝）の調査に着手
平成16年10月6日	第3号トレーニチ（北側括れ部周溝）の調査に着手
平成16年10月8日	第4号トレーニチ（北側括れ部周溝外）の調査に着手
平成16年10月15日	第8号トレーニチ（後円部北西側墳端～周溝）着手
平成16年10月21日	第9号トレーニチ（後円部北西側墳端～周溝）着手
平成16年10月25日	第10号トレーニチ（後円部西側墳端～周溝）の調査に着手
平成16年10月29日	第12、13号トレーニチ（後円部南側周溝斜面）の調査着手
平成16年11月4日	第11号トレーニチ（後円部南西側周溝外）の調査に着手
平成17年1月11日	冬季（第2期）調査を開始
平成17年1月11日	第5、6号トレーニチ（後円部北東墳丘～周溝）調査着手
平成17年1月11日	第10号トレーニチの拡張調査（木柱の南側）を開始
平成17年1月13日	第6号トレーニチで「突出部」確認
平成17年1月17日	第5号トレーニチで「笠形木製品」出土
平成17年1月19日	第7号トレーニチ（後円部北側周溝内）の調査に着手
平成17年1月22日	第7号トレーニチで「周溝区画堤」を確認
平成17年1月24日	第10号トレーニチで「円盤形木製品」他出土
平成17年1月31日	現地見学会を開催（300名参加）
平成17年2月1日	遺跡発掘体験セミナーを開催（20名参加）
平成17年2月5日	第10号トレーニチ出土木製品の取り上げ
平成17年2月5日	第10号トレーニチ検出の「木柱」取り上げ
平成17年2月5日	第6号トレーニチの図化開始
平成17年2月5日	冬季調査の終了



図6 第10号トレーニチ調査風景



図7 現地見学会

## I-3. 調査内容の公開等

発掘調査の成果については、調査期間中からの公開を努めた。調査速報として「ちょうじづか新聞」を発行し、近隣配布等を行なうと同時に山梨県教育委員会ホームページにも掲載し公開した。また、平成17年1月22日には現地見学会を開催し、300名以上の参加者を得た。さらに平成17年3月末日に発掘調査概要報告書を刊行した。

## Ⅱ. 銚子塚古墳の概要

銚子塚古墳は、日本列島中央部の甲府盆地の南東縁域に位置する。甲府盆地南東縁域には、北東側から南東へ向かって流れる笛吹川があり、その左岸には東西方向約12kmにおよぶ曾根丘陵（標高270～400m前後）が広がっている。丘陵の背後には御坂山塊が同方向に延び、さらに南方に富士山が控える地形となる。丘陵の前面は笛吹川左岸の沖積地へ落ちこむ傾斜面となり、笛吹川支流が丘陵を浸食することによって複数の舌状台地が形成されている。銚子塚古墳は、その西側を南東から北西方向へ流れる瀧戸川と東側を同一方向に流れる間門川によって形成された台地先端の東山（標高320m）の北麓の一角を占める。位置的には、丘陵前面となる東山の北向き傾斜面と笛吹川左岸の沖積平野との接点となる標高265～257m付近の南東から北西へ傾く緩斜面にあたる。なお、銚子塚古墳の墳頂の標高は、現況で後円部272.9m、前方部266.0mである。過去の調査成果では、銚子塚古墳の墳丘は、東山の裾斜面を切断・掘削し基盤とし、この上に盛土・版築されたものであることが確認されている。

銚子塚古墳の位置する東山周辺は、弥生後期から古墳時代に至る時期の墳墓関連遺跡が集中的に分布する。代表的な遺跡を挙げるならば、上の平遺跡〔9図-11〕の方形周溝墓群、前方後方墳である小平沢古墳〔22〕、銚子塚古墳〔1〕、径72mの円墳である丸山塚古墳〔2〕、全長120mの前方後円墳である大丸山古墳〔8〕、全長132mの前方後円墳である天神山古墳〔16〕、東山北遺跡〔7〕の4世紀代の30m級方形周溝墓、5世紀代のかんかん塚（茶塚）古墳〔3〕、東山南遺跡〔10〕や岩清水遺跡〔4〕の5世紀代の円形低墳墓などである。これらの時期的位置付けと関連性検討による首長系譜論などに多くの研究成果があり、甲府盆地周辺の古墳時代研究には欠くことのできないフィールドである。また、銚子塚古墳や上の平遺跡など保存整備された遺跡を含む曾根丘陵・甲斐風土記の丘公園・県立考古博物館などが所在することから、それらを通して「歴史」に親しむことのできるエリアとしても幅広いニーズのある地域と言える。

銚子塚古墳の墳丘は前方後円墳であり、前方部を東に向ける。墳丘規模は、全長169m、後円部直径92m、後円部高15m、前方部幅68m、前方部高8.5mであり、前方部先端が剣先状に突出する特異な平面形となる。

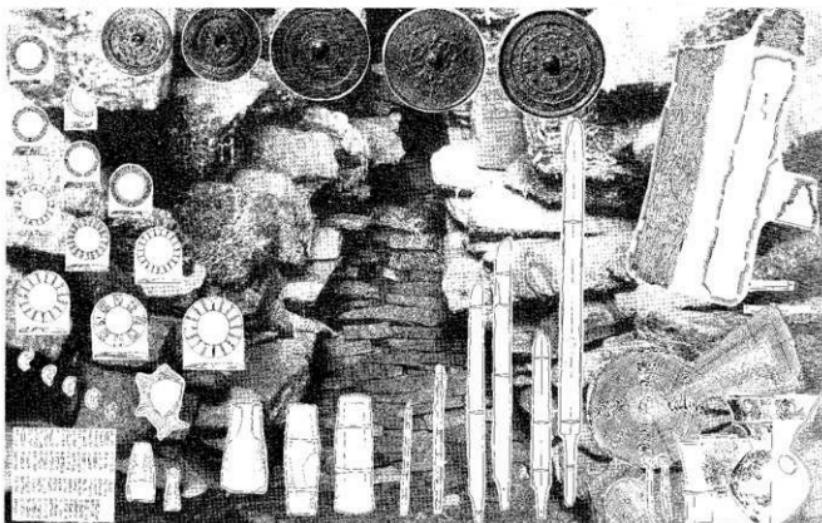


図8 銚子塚古墳と出土品

墳丘には葺石が施され、後円部が3段築成、前方部が2段築成である。墳丘段部には埴輪樹立が確認されており、川西編年Ⅱ期の円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪、閉形埴輪が出土し、スカシ孔には巴形・三角形・長方形が認められている。周溝は前方後円墳と相似形であり、15m~25mの幅を持つ。周溝からはこれまでにS字状口縁台付壺、有孔円盤状木製品、刀剣状木製品などが出土している。また、後円部墳頂の中心部や西寄りに、削石小口積の堅穴式石室があり、その規模は全長6.6m、幅0.93m、高さ1.35mである。

昭和3(1928)年、偶然の機会により石室内の朱刷から多くの副葬品が発見された。副葬品には、図8に示したとおり、環状乳神獸鏡、鼈龍鏡、内行花文鏡、三角縁三神三獸鏡、三角縁神人車馬鏡(岡山県車塚古墳・群馬三本木古墳・福岡県藤崎遺跡出土鏡と同范)などの青銅鏡5面をはじめ、車輪石、石鉗、杵形石製品、貝鉢、勾玉、管玉1、鉄劍、鉄刀、鉄族、鉄斧などがあり、これらは東京国立博物館に収蔵されている。なお、石室発見から2年後の昭和5(1930)年には、隣接する径72mの円墳である丸山塚古墳とともに国史跡に指定されている。

銚子塚古墳は、副葬品の内容、石室形状と方位、墳丘形状などから畿内の色彩の濃い古墳であることが從来から言われてきた。被葬者については諸説あるが、いずれにせよヤマト政権の東国への勢力拡大期に何らかの重要な役割を担った人物が葬られた墳墓が銚子塚古墳である可能性は高いものと考えられる。

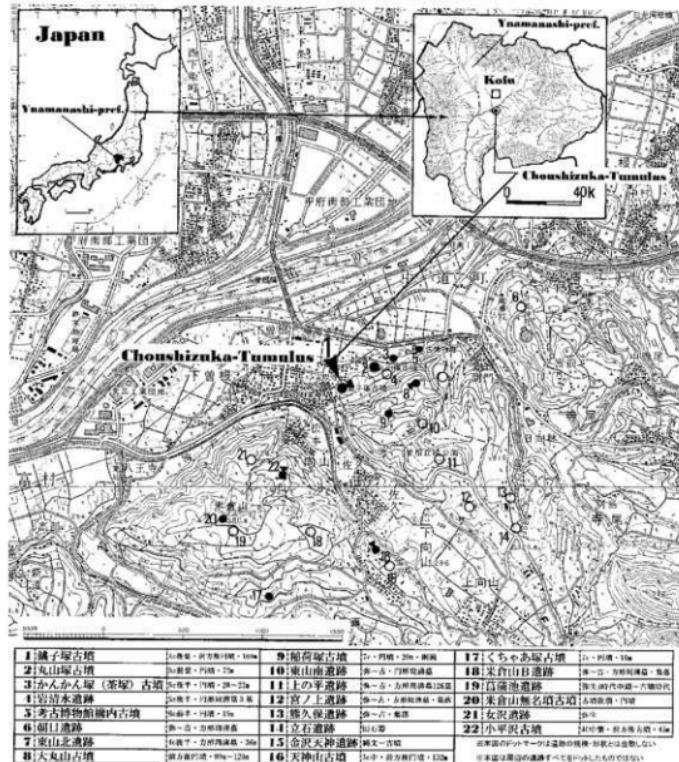


図9 銚子塚古墳の位置と周辺の遺跡

### III. 平成16年度の発掘調査 の概要

ここでは、平成16年度に発掘調査したトレンチの中から主要なものを抽出し、その調査内容の概略を記す。

#### ■第2号トレンチ [図10~12]

第2号トレンチは、北側括れ部の周溝範囲・規模を確認するために設定した長さ27m、幅2mの試掘坑である。調査の結果、隣接する第3号トレンチとともに、現地表下深さ約80cmで周溝底部を確認し、周溝幅が推定堤端から約18.5m幅であることも併せて確認できた。確認された周溝深度および周溝幅は既調査成果（昭和58～60年度調査16号トレンチ）と矛盾せず、相似形周溝を確定することとなった。なお、後円部周溝と前方部周溝の接点は直接確認できなかつたが、西側の第5号トレンチの調査結果などから推定点を設定できた。また、第3号トレンチの北側に設けた第4号トレンチも含め、周溝外端の外側では明確な遺構は確認できなかつたが、周溝外端の外側に見える地山層は周溝外堤の存在を否定する形状ではない。



図10 第2号トレンチ（北東から）



図11 第3号トレンチ調査風景

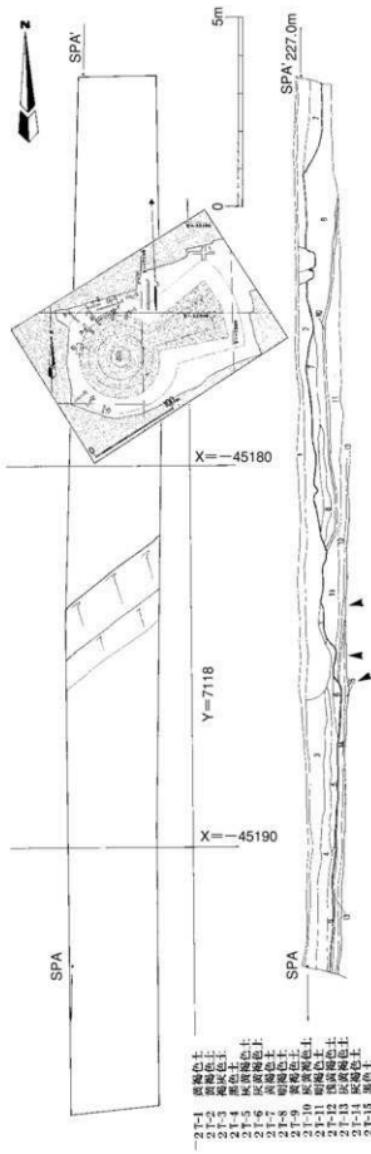


図12 第2号トレンチ平面図・断面図

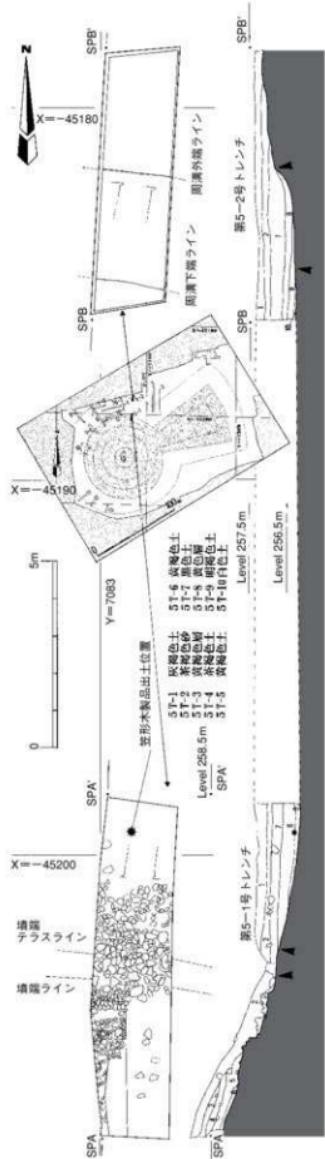


図13 第5-1号・5-2号トレンチ平面図・断面図

#### ■第5号トレンチ [カラー図3～5・29・30、図13・14]

第5号トレンチは、後円部北東側の墳端および周溝の範囲、規模確認するために設定した試掘坑である。墳端を調査対象とした第5-1号トレンチと周溝外端を調査対象とした第5-2号トレンチに分割して調査した。

第5-1号トレンチは未整備区域である後円部墳丘第1段目の一部と周溝までの調査を行なった。墳丘部では葺石の一部と考えられる自然石の分布を確認したが、原位置を確認できたのは墳丘端部から墳丘側へ約3m範囲のみであった。墳丘端の葺石は長さ20～30cm程度の円礫が墳丘斜面の地山層上に差込み置かれるようにならって設置されていたが、墳丘端部に大礫が列状に置かれるような状況はなかった。墳端から約80cm幅で地山層を平坦に造成した部分が確認され、「墳端テラス」と呼称した。墳端テラス上面には、墳丘から崩落したと考えられる埴輪片を含む葺石層が堆積していたが、遺構保護のため面的な掘り下げは行なわず、トレンチ断面図化部のみの調査に留めた。よって、墳端テラス上面への埴輪設置等の有無は確認していない。なお、墳端テラスは、平成16年度第9号・第10号トレンチでも存在を確認しているため、後円部北東側から北西側の墳端には、普遍的に（突出部が検出された6号トレンチ周辺を除く）存在した可能性がある。墳端テラスの先は緩い傾斜をもって周溝へと落ち込む。周溝内には、最下層から順に9層（明褐色土）、8層（黄色土）が堆積し、第9層内上位から「笠形木製品」と考えられる凸レンズ状の断面形をもつ円形の木製品断片が出土した。この木製品の推定直徑は約50cmであり、大阪府菅原御廟山古墳・京都府今里車塚古墳・奈良県四条1・2・7号墳などの類例と比較すると、やや断面の厚みが不足する感はあるが、下面に抉り状の加工が観察できることなどから、現時点では笠形木製品と認識している。

第5-2号トレンチは、周溝外端を確認した。周溝幅は墳端から約21.5mとなる。なお、周溝外端の外側の地山層がやや高まつた後に外側に向けて緩く落ち込んでいく傾向が土層断面で認められた。よって、周溝外堤的な構造が指定範囲外に延びている可能性を指摘できる。



図14 第5-2号トレンチ周溝外端の状況（南西から）

### ■第6号トレンチ [カラー図6~8、図15~19]

第6号トレンチは、後円部北側の墳端および周溝の範囲・規模の確認を目的に設定した試掘坑である。墳端を調査対象とした第6-1号トレンチと周溝外端を調査対象とした第6-2号トレンチに分割した。

当初、第6-1号トレンチは後円部墳丘の一部と周溝までの調査を行なう予定であった。しかし、墳丘端部において、第5号トレンチと同様な墳端テラス状の平坦な地山層面が、長く周溝側へ延びることが確認された。平坦面は推定墳端から周溝側へ約3.5m延び、緩い傾斜面を経て、墳端から約6.5mの周溝内へ帰結することが土層断面[図18A-A'ライン]で確認された。この段階でこの部分が造出状の遺構であることを想定し、形状・規模確認のために第6-1号トレンチに直交する東西方向のトレンチを設定した。結果、東西方向のトレンチから半円形の等高ラインを持つ葺石状の礫の集中が確認された。これによって、南北方向の土層断面で認められた周溝部へ延びた平坦な地山層面が墳丘から半円形に迫り出した遺構「突出部」であると確認された。

確認された突出部は、後円部墳丘の北側に位置し、平面形状は墳端付近でやや末広がりとなる半円形である。断面確認できた部分での最大突出長は、墳端から約6.5mを図り、残存する平坦面上と突出先端部分の高低差は約1mである。東西方向に拡張したトレンチでは、おおよその形状・範囲を把握することが限界であったため、突出部の東西端は不明であるが、平面形状から推定すると約30m程度となる。突出部は地山層である黄褐色土を掘り残す方法により造り出されており、その上面に大小様々な礫が分布する。この礫は墳丘から崩落した葺石と判別しがたいが、現時点では少なくとも突出部先端となる周溝への傾斜面には人為的に葺石状に置かれたものと考えられる。突出部のうち墳丘に近い部分の平坦面上には何らかの遺構等が存在した可能性があるが、土層観察の状況では、すでに上端面は損なわれているものと考えられる。ただし、土層断面[図18A-A'ライン]に見える3層は小礫を多く含む黒色土層であり、突出部平坦面上の残存部の可能性がある。また、第6-1号トレンチの南北方向試掘坑と東西方向試掘坑の交点東側付近には突出部先端斜面に分布する礫よりもはるかに細かい小礫が集中分布しており、突出部平坦面上の原形を留めている可能性がある。同じ交点付近から北に向かい、掘り残し造成された地山層面が延びている。この地山層面は北側の第7号トレンチでも確認されていることから、突出部の中央部から周溝を横断するような高まりが存在した可能性がある。現時点では、これを「陸橋」や「渡堤」と断定することはできないが、その可能性は指摘できよう。なお、図18中に赤色で表示した礫の分布は後世の水田畦畔造成時に積まれた礫である。

第6-1号トレンチでは、突出部の用途・性格を示す遺物は検出されていない。ただし、出土する埴輪片が他の墳端部トレンチ出土品より磨耗度が低く感じられる点は付記しておきたい。

第6-2号トレンチでは、周溝外端部あるいは周溝外端に至る周溝底部の傾斜面を検出することを目的に調査したが、平坦な周溝底部を確認したに留まった。よって、この部分の周溝外端は指定地外まで延びる可能性がある。



図15 第6-1号トレンチ 突出部の礫の出土状況（北西から）



図16 第6-1号トレンチ 突出部の礫の出土状況（南東から）



図17 第6-1号トレンチ 突出部の礫の出土状況（南西から）

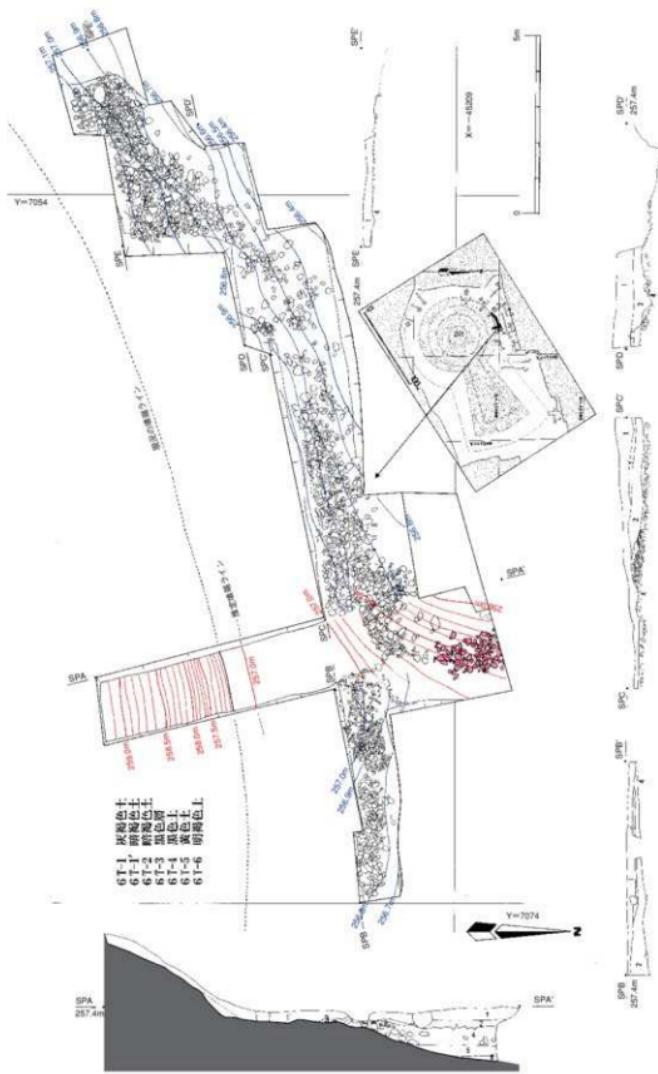


図18 第6-1号トレンチ平面図・断面図（赤字は地山層のコンタ、青字は礫層のコンタ）

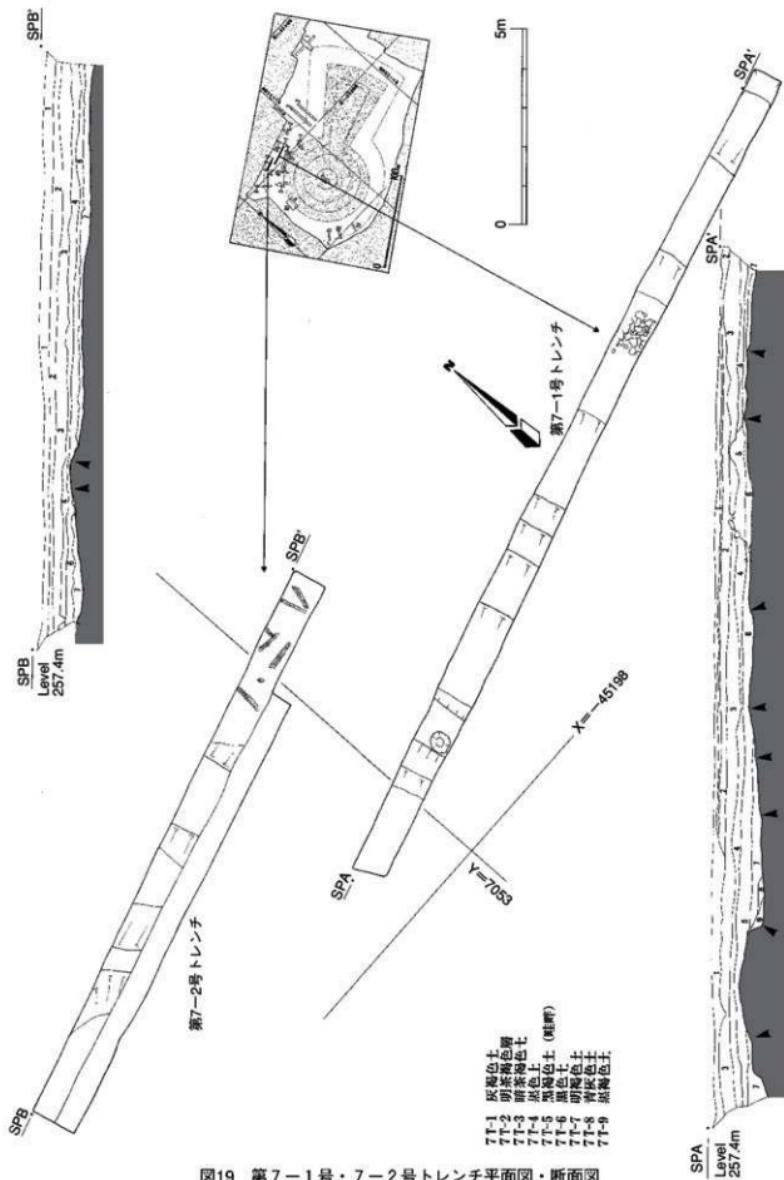


図19 第7-1号・7-2号トレンチ平面図・断面図

### ■第7号トレンチ [カラー図9~11、図19~22]

この試掘坑は、第6号トレンチ（東西方向部）の北側に平行して設定した第7-1号トレンチとさらにその北側の第7-2号トレンチからなる。ともに周溝を横断する遺構の有無や周溝底面の傾斜状況確認を目的に設定した。調査の結果、後円部周溝に係るいくつかの新知見を得た。

1点目は「周溝区画堤」を確認したことである。この遺構は第7-1号トレンチの西端の現地表下約70cm、標高256.7mでその上端面を確認した。横幅は下端幅が約3m、上端幅が約1.2mである。遺構東側の周溝底との高低差は約60cmとなり、西側の周溝底面との高低差は約80cmとなる。よって、この周溝区画堤は周溝底面レベルの変換点に設定された遺構と認識される。遺構の断面形状は上端が半円形に膨らむ台形を呈し、遺構両側面は直角に近い角度で立ち上がる。構築方法は、地山疊層の掘り残しによる。遺構上面に直径50cm深さ20cmの円形土坑1基が確認されている。周溝区画堤はほぼ南北に延びるものと考えられる。南側については、第6号トレンチ検出の突出部西側寄りに向かって延びるが、接続については不明である。北側については、北側の第7-2号トレンチで有無確認を行なった。しかし、第7-1号トレンチから導いた推定延長線上には連続せず、西側約9mも離れた地点で周溝区画堤の存在を確認した。その断面形状は東側に頂点の傾く三角形状を呈し、上端面は東から西へ傾斜する。最高点の標高は256.5m付近であり、周溝底面との高低差は約30cmと低い。この周溝区画堤は南側（周溝側）が狭く、北西側（周溝外端側）が広がる平面形を呈し、周溝外端と区画堤の接点形状を示すようである。高低差の低さもこのことが影響しているものと考えられる。確認した横幅は下端南側3m、北側3.8mであり、上端は南側60cm、北側68cmとなる。

第7-1号トレンチおよび第7-2号トレンチで確認された周溝区画堤には距離差があるが、構築方法は同一である。両者が別の遺構であるのか、屈曲するなどして連結する遺構であるのかなどの関係性については、今回の調査では明らかにすることはできなかった。

2点目は第7-1号トレンチにおいて「階段状の周溝底面」を確認したことである。階段状の段差は、周溝の東西方向（周溝横断に直交する方向）で設けられている。周溝区画堤の東側に顯著であり、東へ向かって標高を上げていく4段の段差を確認することができた。

段差自体は微弱なものであるが、地山層の掘り残しによって造成されている。なお、第7-1号トレンチの東端部、階段状底面のピークとなる部分では、上端幅2.5m、下端幅5.8mの「幅広い高まり」が確認された。これは第6号トレンチ検出の突出部中央部から北に向かって延びる地山層面の延長にあたると考えられる。遺構の捉え方は前述のとおりである。なお、この高まりの上位には19図の第7-1号トレンチ断面図に示したとおり、後世の水田造成時に盛土造成された畔壁とその補強に積まれたと見られる石列がある。このことは周溝内の既存段差を水田造成時に踏襲している可能性を示しており、積まれた石も付近にもともと存在していた可能性がある。



図20 第7-1号トレンチ 階段状になる周溝底面（東から）



図21 第7-1号トレンチ 凸部の広い平坦面（西から）



図22 第7-1号トレンチ 畦畔に伴う石積（南東から）

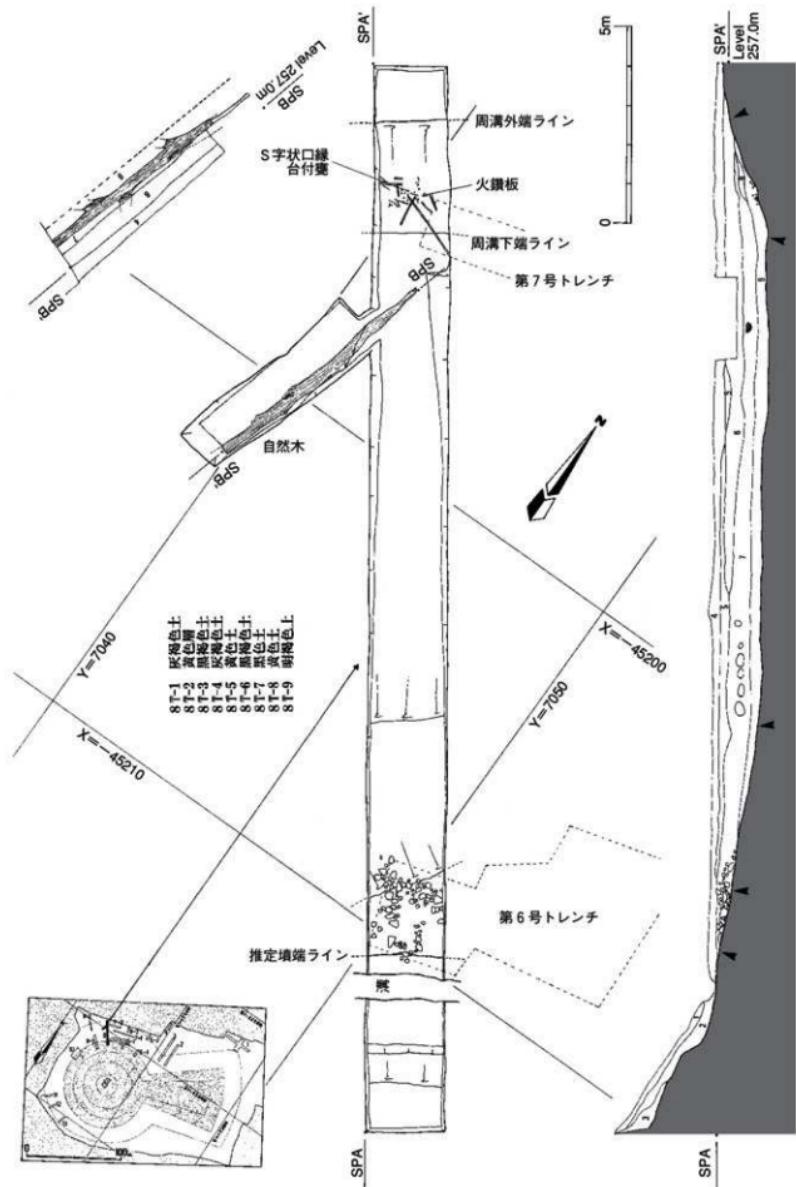


図23 第8号トレンチ平面図・断面図

### ■第8号トレンチ [カラー図12~14、図23~25]

第8号トレンチは、後円部北西側の墳端および周溝の範囲・規模を確認するために設定した。この試掘坑については墳丘から周溝外端までのすべてを横断する断面観察を行なったため、その長さは27mに及ぶ。

墳丘部については、第1段目の一帯で地山層の傾斜と直上の墳丘盛土層と見られる堅く締まる黄色土層を確認した。ただし、原位置を保つ葺石は確認されなかつたため、墳丘表面は損なわれているようである。また、墳端周辺には耕作に伴う溝が掘削され、変換点を明確に捉えることはできなかった。ただし、他トレンチの調査成果などから導いた墳端推定ラインにあたる部分では微妙な変換点らしき段差が認められたため、このラインを墳端と認識した。墳端推定ラインから緩い傾斜面が検出され、その幅はトレンチ西で1.6m~東で2.2mを測った。当初はこの傾斜面を墳端テラスに類するものと認識したが、西側と東側での幅の格差に疑問があつた。この点は、第8号トレンチの調査後に東側で調査した第6号トレンチ西端で回答が得られた。つまり、当初墳端テラスに類すると認識した傾斜面は、第6号トレンチで主要部分を検出した突出部の西端にあたることが判明した。この傾斜面には多数の礫が溜まるように分布していた。当初はこれらを墳丘からの崩落葺石と認識したが、部分的な断ち割り調査を実施した結果、礫層の上面からは埴輪片が多数出土するが、礫層下位からは全く出土しないことが確認された。この結果と第6号トレンチの調査を関連付けて考えると、この礫層の一部は墳丘あるいは突出部造成時に葺石状に置かれた可能性があると言える。この傾斜面はわずかな変換点を経由して周溝へと傾斜していく、墳丘側の周溝下端に至る。この周溝下端は推定墳端ラインからおよそ6mにあたる。周溝底面はオリーブ灰色の地山礫層を掘りこみ造成され、最深部では標高255.9mまで落ち込む。周溝底面はほぼ平坦面を保ちながら、周溝外端側の下端に推定墳端から約19.5mで至る。周溝下端から周溝外端の上端までは緩やかな傾斜で立ち上がる。第8号トレンチで確認された周溝幅は、推定墳端ラインから約21mとなった。周溝外端の傾斜面は緩やかな傾斜で調査区外へ延びており、外堤等の遺構の存在を想起させる状況を呈している。また、周溝外端の傾斜する周溝底面付近からは多くの自然木とともに木製品と土器資料が出土した。出土した木製品に棒状の火鑽板 [カラー図31] がある。土器にはS字状口縁台付甕 [カラー図28] があり、ほぼ全体形を復元可能である。古墳の築造期検討等に重要な資料となるであろう。

第8号トレンチの周溝外端寄りからは自然木 [カラー図12] が出土した。自然木は北側の周溝外側から周溝内へ立木が倒れる出土状態であった。樹種同定は未実施であるが、広葉樹である可能性が高い。周溝最下層土9層には多くの植物遺存体が含まれているため、古環境分析などに備え、サンプリングを行なった。



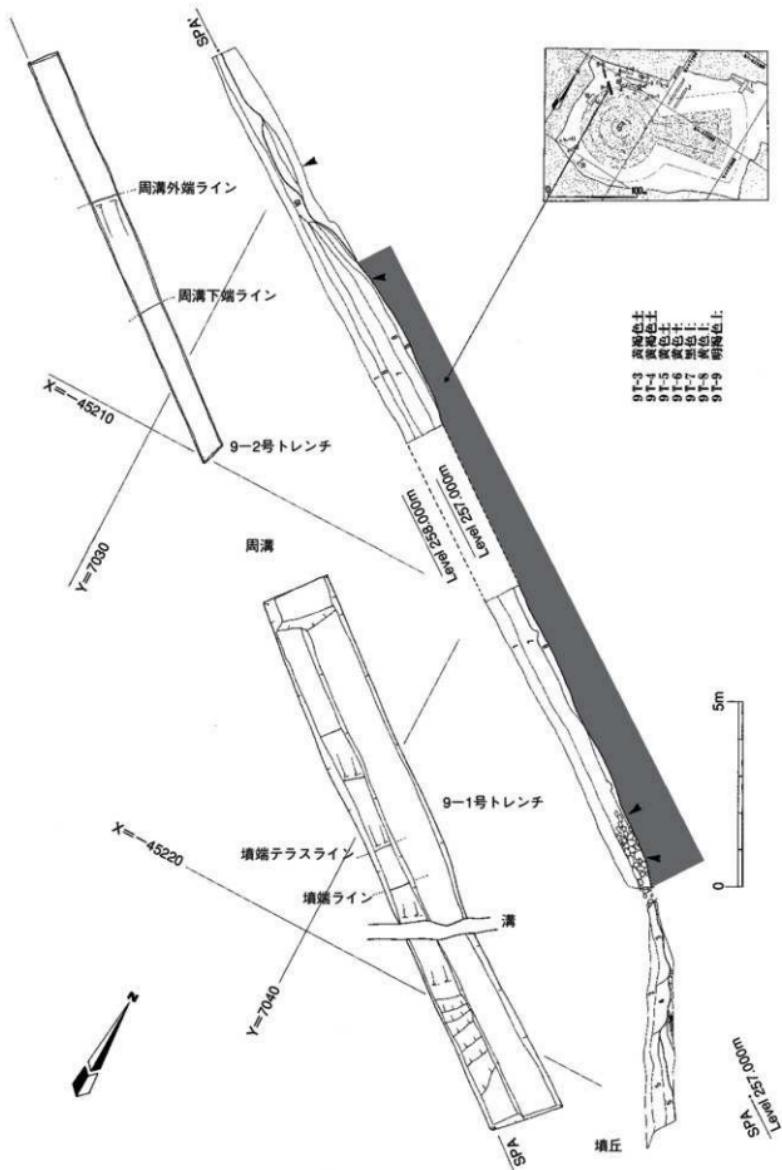
図24 第8号トレンチ墳端状況  
(北西から)



図25 第8号トレンチ周溝外端の土層堆積状況  
(東から)



図26 第9号トレンチ墳端の状況 (北東から)



■第9号トレンチ [図26・27]

第9号トレンチは、後円部北西側の墳端および周溝の範囲・規模を確認するために設定したトレンチであり、東側の第8号トレンチに隣接する。排水の都合上、周溝の中央部の調査を断念し、墳丘側の第9-1号トレンチと周溝外端側の第9-2号トレンチに分割して調査した。墳丘部については、第1段目の一部で地山層の上面を段上に造成した部分を確認したが、攪乱に伴うものである可能性が高い。墳端については、疊層下で変換点を確認できた。墳端には幅1.1mの墳端テラスも確認でき、この墳端テラス上面に墳丘から崩落したと見られる葺石と見られる礫が層状に堆積していた。この疊層内からは多くの埴輪片が出土しており、隣接の第8号トレンチなどに見られる人為的に掘えた礫とは異質である。墳端テラスから周溝内へは緩やかに傾斜しながら落ち込み、途中に僅かな変換点は認められるが、明瞭な段差ではなかった。未調査部分を経て、第9-2号トレンチに至り、標高255.9mを測る周溝底面の最深部となる。第9号トレンチで確認した周溝底面形状は、周溝外端に近づくほど深度を増すものであり、他のトレンチでの確認事例と異なる状況であった。このことは、第9号トレンチが銚子塚古墳の周溝のうちで最も標高の低い地点に位置することと関連している可能性がある。また、周溝の立ち上がりは第8号トレンチのそれよりもさらに緩やかであったが、墳端から約19mで周溝端部を確認することができた。周溝外端の外側も約4m断面調査したが、外堤などの遺構を認識するまでは至らなかった。

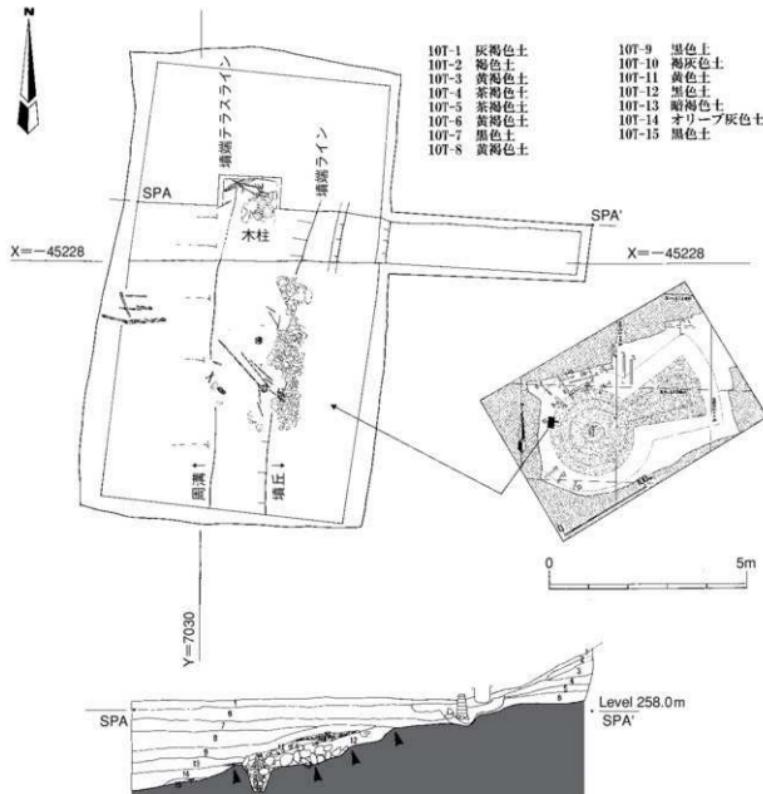


図28 第10号トレンチ平面図・断面図

### ■第10号トレーニング [カラー図15~25、図28~44]

第10号トレーニングは、後円部西側や北寄りに設定した試掘坑である。この周辺は現況では墳丘端部が抉れ歪んでいたため、地下で墳端を確認することを主目的とした。また、後円部西側は指定範囲内での周溝外端確認できないものと考えられたため、周溝底部の傾斜状況を把握し、周溝外端を推定する目的も併せもち調査に臨んだ。結果的には、墳端は地表下約1.7mで確認できたが、周溝外端は、トレーニング内で把握することはできなかった。ただし、北側の第8・9号トレーニングで周溝外端ラインが推定できる状態ではある。

第10号トレーニングについては、秋季調査の段階で長さ12m、幅1.5mのトレーニング調査を実施し、その後の冬季調査時に秋季設定トレーニングを拡張調査した。これは、後述する「木柱」が秋季調査終了段階で検出されたことに起因する。拡張調査は木柱の性格究明を目的とし、木柱を中心に南側へ幅約8m、東西幅7mを拡張した「南拡張区」と埋設状況の確認を目的に木柱の北側に設けた南北幅1m、東西幅2mの「北拡張区」の2箇所から成る。



図29 第10号トレーニング調査前風景（南西から）



図30 第10号トレーニング作業風景（南から）



図31 第10号トレーニング木柱周辺の土層体積状況（南から）



図32  
木柱①



図33  
木柱②



図34  
木柱③



図35  
木柱④



図36  
木柱⑤



図37  
木柱⑥



図38  
木柱⑦



図39  
木柱⑧

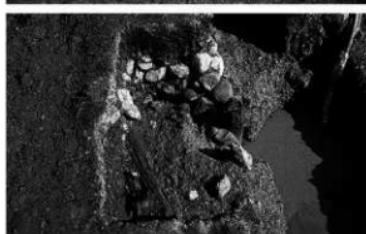


図40  
木柱⑨



図41  
木柱⑩

第10号トレンチの層序については、秋季調査で設定した幅1.5mの東西方向トレンチおよび冬季調査における南拡張区の南壁面で基本を把握しているが、ここでは秋季調査トレンチ北壁の層序図を図示した〔図28〕。土層観察の結果、現況の墳丘裾部は、現地表面とほぼ同一レベルまで後世に削平されたことが判明した。層序図東端の墳丘側の地山ラインが平行状態になるのはそのためである。現況の墳丘端部に見える箇所にはU字管水路やコンクリート基礎を設置するための掘削が地山層まで達しており、墳丘面は損なわれている。しかし、現況墳端と平坦地表面の境界から西の地表下約70センチ以下では墳丘斜面および墳端・墳端テラスが良好な状態で残存していることがわかった。墳端は標高256.6m付近で明確に把握でき、墳丘に向かって少なくとも2段以上の階段状の段差が地山層を削り出す方法で設けられていた。墳端テラスは断面図作成箇所では約2mの幅があるが、南拡張区南壁では幅1.4mと差異が認められ、北から南に向けて墳端テラスが狭まっていくことが、南拡張区の平面的調査で判明している。

木柱は、2m幅の墳端テラスの先端近くの周溝寄りから検出された。直径80cm、深さ70cmの円形土坑の中心部に最大直径20cm、残存長90cmの木柱が埋設された状態が確認された〔カラー図16〕。木柱の表面は金属器で丁寧に面取り調整され、下端面は平面的に切断調整されている〔カラー図17〕。この面を土坑底面に接させ、直立させた後、木柱と土坑の間に砂礫と土を隙き固めるように充填している。さらに土坑上面の墳丘テラス面に凸状に盛り上がるまで砂礫が積み上げられ、最終的には木柱を中心に30~50cm大の礫を花弁状に配置していることが観察された。木柱の上端部は朽ち折れているが、さらに上方へ延びていた可能性が高く、埋設部分が80~90cmであることからすれば、数メートル規模の立柱であった可能性もある。木柱の上端面には平坦な扁平礫が伏せ置かれるよう検出されたが、人為的なもの否かは不明である。木柱の設置された墳端テラス上面には自然木や木製品を含む13層土が載る。木製品等は木柱埋設土坑の充填砂礫上に載る状態で分布しており、少なくとも木柱埋設後に木製品等や13層土が堆積したことが確認されている。なお、13層土は後述の南拡張区出土の有孔円盤状木製品などの木製品類を包含する土層である。木柱の検出過程については図32~41に図示したが、極めて入念な固定作業が見え、この木柱の設置目的が伺える。墳端テラスは本中理設土坑の西側の変換点で終結し、周溝への傾斜面となる。周溝については約2.5m分を調査できたが、確認できた最深部の標高256.0m点

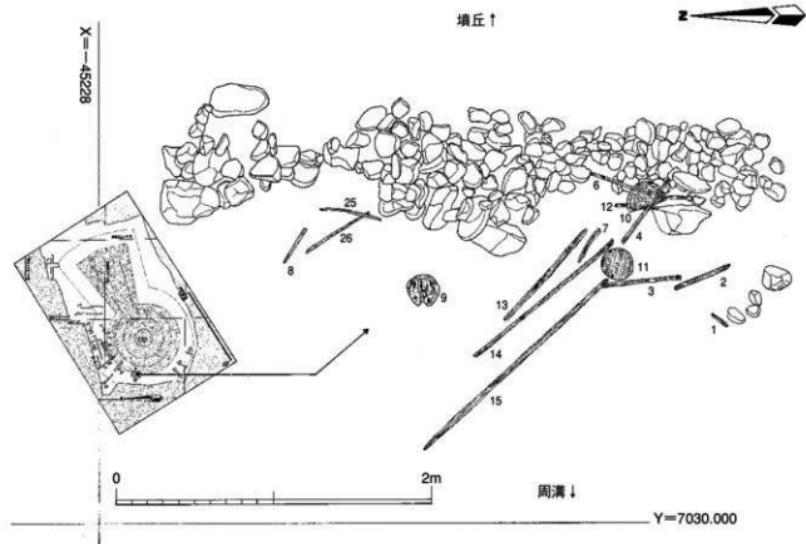


図42 第10号トレンチ木製品の出土状況

からさらに西側へも傾斜している。周溝底面には、15層・14層が順に堆積する。これらの土層には13層出土の木製品とは異質な掘削用具と見られる製品〔カラー図36〕が含まれることが特徴的である。14層上には13層が載り、木柱埋設土坑を覆いながら、墳丘端よりやや墳丘寄りの部分まで堆積している。13層上には墳丘から崩落した葺石や埴輪を多量に含む12層が堆積し、さらに上位には小礫を多く含む11層・10層が堆積し、墳丘からの崩落・流出土に由来すると見られる9層とした黒色土が載り、客土や表土層に至る。このように第10号トレンチの東西断面は、墳丘造成、木柱や木製品の設置・埋没過程、土層による木製品の性格差、葺石・墳丘土の崩落過程などに係る様々な情報を含むため、さらなる検討が必要である。なお、第10号トレンチ北拡張区は、木柱の取り上げを含む詳細調査のために冬季調査時に設定した試掘坑である。

第10号トレンチ南拡張区は、木柱の南側に設けた面的な調査を行なうために設けた試掘坑である。木柱の他事例検討などから考慮された墳端に列状に並ぶ木柱群の存在有無を備前前に状況確認する必要があると判断し設定した。拡張調査の結果、木柱は拡張範囲内の南側約6.5m以内には並ばないことが確認された。しかし、このことで検出された木柱が單一の立柱であるとは断言できず、北側に並ぶ可能性や間隔がもっと広い可能性などを残している。南拡張区では、木柱は存在しなかつたが、墳端周辺の周溝覆土上面（14層上面）から多くの木製品類が出土した。これらの木製品には有孔円盤状木製品3点、刀剣状木製品1点、棒状木製品多数などがあり、過去の調査（昭和58～60年度13号トレンチ・平成13年度第3号トレンチ）で出土したことのある「木製埴輪」と称される木製品と同種であることが判明した。これらの木製品は、墳端に堆積した崩落葺石層である12層土の掘り下げ後、13層の掘り下げが終了しかけた段階で集中的に出土した。出土状況からは樹立位置から倒壊した状態というよりは、墳丘側から周溝方向へ投棄されたような状態であった。立面的な出土位置は、周溝の第二次堆積土である14層の上面には水平堆積し、かつ墳端の葺石基底部と考えられる石列の上面に載る状態である。端的に表現すれば、墳丘端テラス面と13層に木製品が挟まれる状態と言える。なお、13層からは埴輪片がまったく出土しないことが特徴的である。今回出土した木製品については、その遺存状態が極めて良好であり、これらの木製品が組み立て式の製品であることを示す部品や組み立ての痕跡が明瞭に残っている。また、製品の表面には著しく焼け焦げた部位があり、これらの使用や廃棄に係る情報を多数含む。これら的情報は、使用状況の復元的考察にも迫れる可能性のあるものであり、大変重要である。例えば、図42-No 2はホゾ加工された棒状製品であり、No 3や尖端加工されたNo15と接合が確認されている。棒状製品の接合後全長は2.4mを測る。また、No 3のホゾは、No11の有孔円盤状木製品の中央穴規模に合致し、両者が組み合わさる可能性が高い。また、No 11の円盤状木製品の縁辺にある3つの方孔には木製目釘が確認されている。この木製目釘が固定されていたのがNo 7の木製目釘が残存する刀剣状木製品であり、両者がセットとなることが確実である。よって、No 2・3・15・11・7は同一製品の部品と分かり、2.4mの棒先端に20cm径の有孔円盤が載り、その上に刀状木製品が差し込まれかつ目釘固定されたものであることがほぼ確定的である。2.4mという長大な組み立て式の木製品が古墳に伴うことが確認されたことは、その性格・用途に関する議論を呼ぶであろう。いずれにせよ、これらの木製品が古墳の葬送あるいは追加祭祀行為に伴う製品と見るのが自然であろうが詳述は本報告に譲りたい。

有孔円盤状木製品などが載る14層は砂質土であり周溝底面の堆積土である。この第14層および部分的な最下層の15層にも木製品や自然木が含まれることが秋季調査第10号ト



図43 第10号トレンチ南拡張区サブトレンチ（北西から）



図44 第10号トレンチ南拡張区サブトレンチ内出土の木製品（北から）

レンチで確認済みであった。よって、史跡保護のために面的な掘り下げは行なわず、部分的なサブレンチ調査に留めた。サブレンチは13層出土木製品の集中地点に東西方向幅1mで設け、13層と木製品、葺石基底部、14層と木製品のそれぞれの層序関係把握に努めた。結果、14層以下には、ヘラ状木製品〔図36-2〕などが含まれることや周溝底面が南側へ向けて標高を上げていることなどが確認された。第10号トレンチについては、土糞で造構面や葺石基底部を保護したのちに埋め戻した。

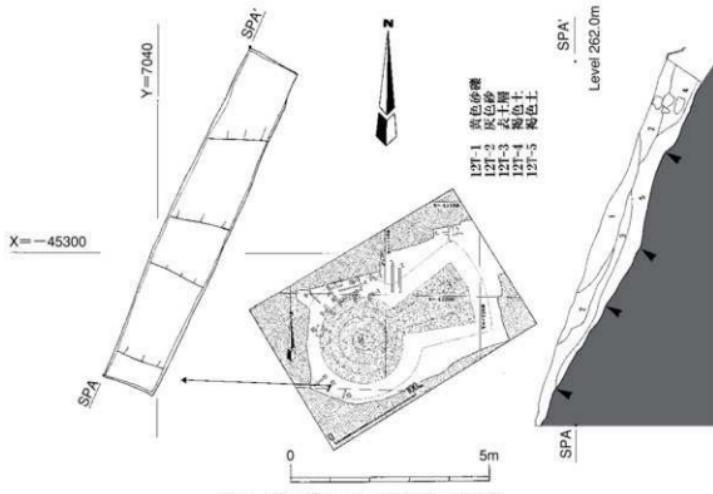


図45 第12号トレンチ平面図・断面図

#### ■第12号トレンチ [図45~47]

銚子塚古墳後円部の南側には東山からの傾斜面が控えている。この傾斜面を切断・掘削して銚子塚古墳は築造されるため、墳丘南側の周溝外端は長い傾斜面の中位に位置することになる。

第12号トレンチは後円部南西側の周溝外側斜面に設定し、図46 後円部南側の傾斜面(北東から)た試掘坑であり、傾斜面の古墳築造に伴う造成痕跡を把握するために設定した。同目的の試掘坑には、第11・13号トレンチがある。第12号トレンチ調査の結果、地山層を掘りこんで造成された段部が4段確認された。特にトレンチ南端で確認した段差は周溝外端の肩部と考えられ、墳丘端部からの幅は20mとなる。また、同様の肩部が第11・13号トレンチでも確認されている。この肩部は墳丘南側での過去の調査(昭和58~60年度4-2、3-2、2-3号トレンチ)で確認された周溝外端肩部に連結すると考えられる。なお、第11号トレンチ以西の状況は指定地外であるため不明である。現状地形の観察からは、周溝外端肩部が標高を下げながら、後円部径に沿うように円弧を描きつつ続き、後円部西側から北西部の周溝外端へ連結していくことが予測される。



図47 第12号トレンチ

## IV. 平成16年度出土遺物の概要

ここでは、平成16年度の発掘調査で出土した遺物の中から主要なものを抽出してその概略を記す。ただし、出土遺物については、平成17年3月の本書編集段階で、洗浄も未完了の状態であることを付記しておきたい。

### ■土器【カラー図28・図48】

第8号トレンチの周溝内からS字状口縁台付彫形土器1個体【カラー図28・図48】が出土した。出土位置は周溝外端の立ち上がり部分の傾斜面であり、底面直上層から集中的に破片が出土したものである【図23】。周溝の最下層からの出土であり、周溝の埋没時期、ひいては銚子塚古墳の築造期を推定するために重要な資料となろう。

本資料は、口径が12.8cm、器高が推定復元ではあるが約27cm程度、脚部高が4cmである。体部的最大径は肩部以下、体部中位付近に求められる。口縁部は横撫で調整され、口唇端部は丸みを帯びる。口縁部上段はやや外反するが上端に平坦面は見られない。各段の外面は緩やかに屈曲し、口縁下段部が肥厚する特徴を持つ。

体部外面には斜め方向の粗い刷毛目が施され、肩部の下位で羽状に交差しているが、肩部の横刷毛目はない。頸部内面は撫で調整され、体部内面には縦方向の指頭撫でが施されるのみで、刷毛目は見られない。脚部外面には斜め方向の刷毛目が僅かに施されるが、下端部にはほとんど見られないが、脚部下端部内面には折り返しがある。土器の全体形については、推定復元の段階ではあるが、以上のような特徴から、この資料は甲府盆地周辺に分布するS字状口縁台付彫形土器の中でも新段階に位置付けられる地域的な特色を帯び始めた時期の資料に該当し、時期的には4世紀後葉段階の所産が考えられるであろう。銚子塚古墳からは過去の調査でもS字状口縁台付彫形土器の破片資料が出土しているが、本資料のように全体形が窺えるものは初の事例である。この資料が直ちに銚子塚古墳の築造時期を示すとは言えないが、少なくともこの資料の所産時期には周溝底面が露呈していたことは明らかである。なお、今回の発掘調査では第8号トレンチおよび第9号トレンチのからもごく少量であるが、土器片が出土しているため、今後の整理作業でさらに多くの土器資料が確認される可能性がある。

### ■埴輪【カラー図26・27、図49】

第1号トレンチ・第11～13号トレンチを除くすべての試掘坑から埴輪片が出土している。ただし、設置状態を検出した箇所ではなく、すべて埴丘斜面あるいは埴端テラス面・周溝の覆土から出土した破片資料である。詳細な出土量は未算定であるが、60cm×40cm大の遺物収納ケースに破片を平置きした状態で約20ケース分が出土している。内容の詳細は未検討であるが、およそその出土傾向を示すためにカラー写真を示し【カラー図26・27】、掲載した埴輪片の出土トレンチを示した【図49】。今のところ、これまでの調査や表面探査などで知られる銚子塚古墳の埴輪構成を覆すものは確認されていない。つまり、外面2次タテハケ調整主体で極稀にA種ヨコハケ調整を施す円筒埴輪、外面タテハケ調整の朝顔形埴輪、巴形スカシをもつ二重口縁形の壺形埴輪などが主要な器種である。器種を問わず、ほぼすべての破片断面に器壁内部の黒色化が認められるなど野焼き焼成による埴輪群であることが追認された。

これらの埴輪片のうち、もっとも出土量が多いのは円筒埴輪であり、埴輪片が出土したすべてのトレンチから出土している。円筒埴輪の突帯はすべて貼り付けによるものであるが、断面が台形状（またはM字状）になる「台形突帯グループ」と断面が長く三角形状に突出する「長三角突帯グループ」の2種に大別される。これらはさらに断面形状や突出度の高低などによって細分類が可能であるが、その詳細は本報告に譲る。ただし、台形突帯グループが緻密な胎土で製作されているのに対し、長三角突帯グループは粗い胎土である傾向が認められ、形状による胎土差が存在することが伺い知れる。このことはまた、製作者系統や製作地の違いを示している可能性もある。

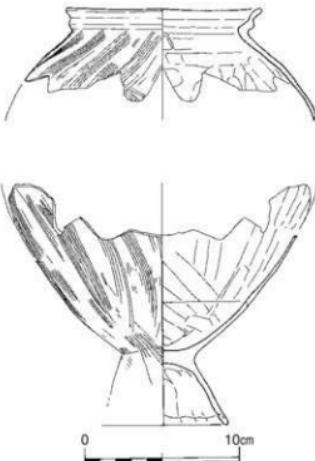


図48 第8号トレンチ出土のS字型

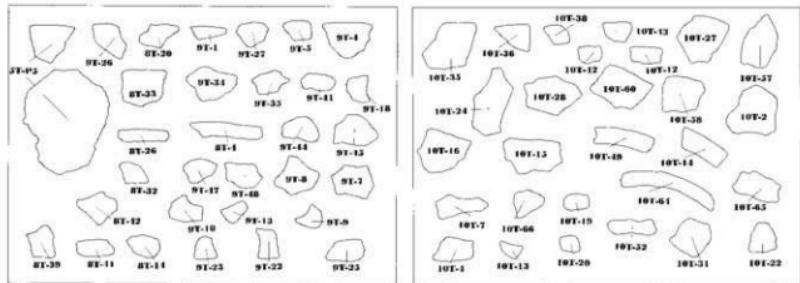


図49 カラー図26・27で図示した埴輪

り大変興味深い。円筒埴輪のスカシには少なくとも三角形、四角形を確認している。円筒埴輪の巴形スカシについては、明確に認められたものはないが、壺形埴輪とは明らかに異なる破片が存在することは確かである。スカシの配列等は接合作業が未着手のため、判断できる資料は今のところない。なお、今回の発掘調査では、埴輪が樹立された地点の調査は行なっていないこともあり、円筒埴輪の底部から口辺部の全体像を残す資料は今のところ1点もない。よって、段数や突帯数については不明とせざるを得ない。

朝顔形埴輪は、円筒埴輪に比べれば出土量は決して多くないが各トレンチから出土している。特に第5—1号トレンチの墳端テラス面から出土した口辺部資料【カラー図26—P5】は器表面の残存が良く、台形突帯端部および器外表面の一部に赤色塗料の痕跡が認められるなど新たな知見を得ている。これまでの出土資料では確認されていなかったことであり、その位置付けに検討をする。

壺形埴輪は、円筒埴輪や朝顔形埴輪に比べて圧倒的に出土量が少ないが、他の器種と比べて胎土が緻密で焼成も良好であることから、判別は比較的容易と考えられる。今回の調査では形状が覗えるような大型資料は得られていない。体部あるいは口辺部資料が主であるが、8Tの墳丘斜面から底部破片資料が出土している。なお、今回の調査では今のところ、過去に出土している圓形埴輪などの器財埴輪は確認されていないが、今後の詳細な整理調査を待ちたい。

#### ■木製品【カラー図29~36】

今回の発掘調査は周溝部を主たる対象としたこともあり、多くの木製品や自然木を出土資料として得ることができた。以下、各トレンチ別に出土した木製品等の概要を記す。

第1~4号トレンチからは木製品の出土は見られなかった。

第5—1号トレンチでは、周溝部の履土（8~9層）中から笠形木製品の一部と考えられる凸レンズ状の断面形状を呈す直径50cmの円形木製品が出土した。直径は50cmを測り、残存する厚みは約4cmであるが、表面の腐食が著しいことから元来はより厚みのあるものだったと推測される。裏面にはわずかではあるが抉りの痕跡があるが、ホゾ穴は確認できない。仮に4世紀代の笠形木製品であるとすれば、国内でも最古級であり、現在のところ東日本における初出土事例となる。

第6号および第7—1号トレンチからは木製品は出土していない。また、第7—2号トレンチの東端部の周溝底面からは多くの自然樹が出土したが木製品は認められていない。ただし、一部の自然木には人為的な切断面と見られる平坦面がある点は注意を要する。

第8号トレンチからは棒状の火鑽板のほか、柄状木製品の一部などが出土している【巻頭カラー図31】。火鑽板については、S字状口縁付菱形土器と近接した同一土層内から出土しているが、古墳からの発火具出土事例として用途など詳細な検討を要することとなろう。また、柄状木製品の表面には斜行する格子目の装飾が刻まれているが全体形状等は不明である。

第9号トレンチからは木製品は出土していない。

第10号トレンチからは、今回の調査で最も多く木製品類の出土を見た。それらの出土状況については前述したとおりであるが、製品に関する補足を行なう。まず、木柱【カラー図16~18】であるが、材質は針葉樹（スギ）

の可能性が高く、巨木の辺材を加工したものである。残存する年輪幅は凡そ140年分あるため、年輪年代測定の実施を検討中である。仮に伐採年に係るデータが得られれば、古墳の築造時期についての有効な情報となり、東日本の前期古墳研究に資するところ大となろう。また、木柱の表面や下端部には工具による加工痕跡が明晰に残存しており、加工対象物から古墳時代前期の刃物研究や木材加工研究に有益な情報を多数有している。木柱の設置目的・用途へのアプローチもさることながら、この方面についての詳細検討も本報告作成に向けて課せられた課題であろう。なお、木柱埋設土坑外の東側からは杵状の形状を呈す木製品〔カラー図32〕が出土している。軸部分が焼け焦げるなど、第10号トレンチ南拡張区からの出土木製品に類似した状況であるが用途は不明である。掛矢など戦打具の可能性もあるが、威儀具などの部品である可能性もある。これもまた検討課題として提起するに留めるが、木柱とその他の木製品群との関係を検討する際のキーポイントとなる木製品であろう。

第10号トレンチ南拡張区出土木製品群の出土状況は前述のとおりである。これらの木製品は出土当初から「木の埴輪」とも換言できる「木製樹物」と呼称してきた。しかしながら、基礎的な整理作業段階で部品を強固に固定する木製目釘が存在することなどが確認され始めていることから、果たして「木製樹物」と呼称すべきか否かさらなる検討をする状況になっている。これらの製品は使用状況や使用時期はともかく、古墳の葬送儀礼に伴う木製品の一部であることは間違いないであろうが、用途を特定してしまう可能性のある「木の埴輪」あるいは「木製樹物」とは呼称しがたい。つまり、蓋などの威儀具そのものである可能性や他の祭具である可能性もあり、類似例の乏しさからも用語選択に迷うところである。よって、ここでは形状を示す用語としての「有孔円盤状木製品」、「棒状木製品」、「刀剣状木製品」として報告するに留め、総体を示す用語については、本報告作成に向けて適切に選択あるいは立案することを目指したいと考える。なお、上述の木製品類の多くが火熱を受けて部分的に焼け焦げていることは、この木製品群の用途・性格を考察する際の重要なポイントになろう。部分的な焼け焦げは火災などの偶発的事象に伴うものとは考えがたく、やはり人為的な行為を想起させる。埴端あるいは埴丘上で「火」を用いた祭祀的な行為があった可能性もある。古墳出土の木製品の事例中には、同様の焼け焦げが認められることから見ても、鏡子塚古墳における状況が単なる地方の古墳における特異な現象との認識に立つ必要はなさそうである。

第10号トレンチ出土の木製品類については、製品そのものの検討もさることながら平面的あるいは立面的な出土状況データからの検討も十分に行なう必要がある。特に、周溝の最下層から出土した木製品群とその上層から層位差をもって出土した木製品群の時期差や用途差の検討やそれらと木柱との関連性検討などからは、古墳の築造から葬送儀礼、果ては埴丘崩落などの埋没過程までをも含めた古墳のライフサイクル研究に発展できる可能性がある。これらの点で第10号トレンチは極めて重要な試掘坑であると考えられる。

なお、第11～13号トレンチからは木製品類は出土していない。

#### ■自然遺物

自然遺物については、第5－1、7－2、8、10号の各トレンチから出土した自然木が主なるものである。また、第8および9号トレンチの周溝覆土の最下層には多くの植物遺存体が含まれていることが確認されており、肉眼観察レベルでもヒシノミなど水生植物の種子などが確認できる。土壤についてはサンプル採取してあるため、可能な限り古環境分析などの取り組みも必要であろう。なお、同層内には甲虫などの昆虫遺体も含まれていることを付記しておきたい。



図50 トレンチ埋め戻し



図51 調査終了後（北西から）

## V. あとがき

ここでは、平成16年度の銚子塚古墳の発掘調査で得られた成果についてまとめる。

### ■遺構に関すること

#### ①周溝規模・形状の確認について

今回の発掘調査では、北側括れ部周溝・後円部北東側～北西側周溝・後円部南西側周溝の規模と形状について確認することができた。北側括れ部周溝については第2および3号トレンチ（本書では第2号トレンチのみ掲載）で墳端から18.5m幅、後円部北東側～北西側周溝については第5-1号・5-2号・6-1号・7-1号・7-2号・8号・9号・10号トレンチで墳端から19.5m～21.5m幅、後円部南西側周溝については第11号・12号・13号トレンチ（本書では第12号トレンチのみ掲載）で墳端から20m幅をそれぞれ確認している。また、調査の結果、後円部西側および北側の周溝外端の一部は史跡指定範囲の外側に延びていることが確認された。

#### ②周溝外端の状況確認について

今回の発掘調査では、周溝外端の外側部分における遺構等を明確に把握することはできなかったが、いくつかの試掘坑で周溝外堤の存在を窺わせる状況を確認している。また、本書では記述できなかったが、前方部北東側に設けた第1号トレンチでは周溝外端の外側に人為的な段差が存在することを確認している。これが古墳築造に伴うものであるか否かは検討を要するが、その方向性は墳丘に合致している。これらのことから、墳丘北側の周溝外には堤や段差などの遺構が広がっている可能性が高いものと考えられる。なお、墳丘北側周溝外端の外側を一部的にでも調査対象とした今回の試掘坑は、第1号・2号・3号・4号・5-2号・8号・9号トレンチである。

#### ③周溝区画堤について

今回の発掘調査では、周溝内に土手状の区画堤が設けられていることが第7-1号トレンチおよび第7-2号トレンチで確認された。周溝区画堤の用途については明言できないが、7-1号トレンチでは周溝底面の変換点付近に設けられた施設であることが確認されたことからみて、周溝内の水位調節機能などが推測されるが用途を特定することはできていない。ただし、この遺構が地山層を掘り残す方法で造成されていることは、古墳築造あるいは築造企画段階において既にこのような施設の設定を意図していたことがわかるのであり、自然地形を巧みに利用した築造者らの高度な選地・測量知識を窺わせるものとして興味深い。なお、周溝区画堤が周溝を横断するか否かについては明確にできなかったが、周溝内で途切れる可能性は低いものと考えているが、両トレンチでそれぞれ検出された周溝区画堤の連結有無については、不明とせざるを得ない。

しかし、このような周溝内の遺構が東日本の前期古墳に存在することが確認された意義は大きく、今後の古墳調査や研究に与える影響は大きいものと考えられる。

#### ④階段状の周溝底面造成について

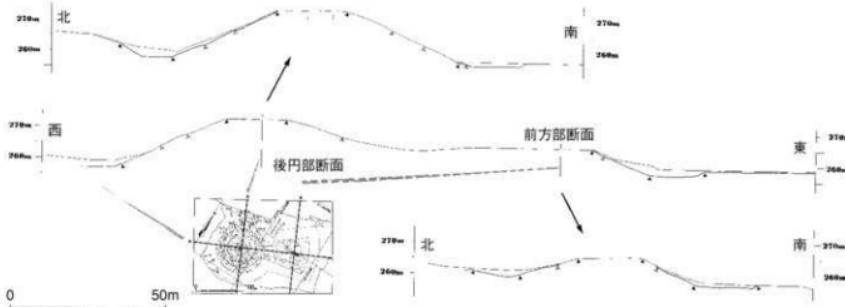


図52 銚子塚古墳断面図

第7-1号トレンチの周溝底面が階段状に造成されていることが確認された。極めて微弱な段差造成によるものではあるが、単純な平坦面あるいは傾斜面を想定してきた周溝底面のイメージを覆すものとなった。関連性のある西側の周溝区画堤や東側に確認されている突出部から延びる幅広い高まりと併せ詳細検討を進めたい。

#### ⑤突出部について

第6-1号トレンチにおいて、墳端から周溝内へ台状に突き出た突出部が存在することを確認した。この遺構の設置目的は不明であるが、4世紀代の奈良県東殿塚古墳や同赤土山古墳などに見られる埴輪からの張り出し遺構との関連性や同行燈山古墳（崇神天皇陵）や渋谷向山古墳（景行天皇陵）などの巨大古墳に見られる後円部の突出部分との関連性など検討すべき課題が多い。また、4世紀末～5世紀初頭以降の祭祀・埋葬施設としての造出との関連性も検討すべき課題であろう。

#### ■遺物に関すること

出土遺物の概要については前述のとおりであるが、要点をまとめる。

##### ①年代決定に関わること

今回の発掘調査では、第8号トレンチで検出されたS字状口縁台付壺など銚子塚古墳の年代を考える上で重要な資料を得ることができた。また、出土した木柱や木製品などの理化学的な年代分析によってより詳細な時期推定根拠が将来的に得られる可能性が高まっている。埴輪についても、これまで以上に多数の資料を得たことにより、製作年代や製作者系統の検討などが進捗することになるであろう。

##### ②木製品に関すること

出土した木製品については、東日本では初の出土事例となるものや他に類例のないものなども含まれている。これらについては、汎日本的あるいは東アジアも含めた詳細検討が必要となるが、そこから得られる成果は山梨県や東日本を越えた古墳時代研究の大きな成果となることが予測される。

平成16年度の発掘調査は、実施時期が「秋の台風シーズン」や「降雪を伴う厳冬期」にあたったため、作業は激しい湧水、豪雨による水没、複数回におよぶ降雪、地表面の凍結などまさに自然との闘いの様相を呈すものとなり、調査期間という時間的制約がさらに調査スタッフを困窮させるものとなった。しかしながら、特に冬季調査では、新たな遺構・遺物など銚子塚古墳の知られざる姿が次々に発見され、マスコミにも大きく取り上げられスタッフ一同の努力が報われた結果となった。また、そのような中で実施した現地説明会には、山梨県内では異例の参加者数となる300名を越す市民の参加を得ることができたことは望外の喜びであった。調査内容については、不明点や課題を多く残す不十分な面もあるが、史跡整備に係る必要な情報は得られたものと考えられる。整備事業の実施にあたっては、今回の調査成果を十分に活かしながら、広く活用される史跡となるよう心して臨みたい。また、本書を介して多くの方々から今回の調査成果に関するご教示を賜りながら、本報告をまとめたい。

末筆となるが、今回の発掘調査にご協力をいただいた全ての方々に感謝申し上げ概要の報告を終える。

#### 【参考文献】

- 石野博信（編） 1995 「全国古墳編年集成」 雄山閣  
一瀬和夫・車崎正彦（編） 2004 「考古資料大観」 第4巻（弥生・古墳時代 墓輪） 小学館  
大垣市教育委員会 2003 『史跡豊飯大塚古墳』  
大塚初重 2002 「東国の古墳と大和政権」 吉川弘文館  
大塚初重・小林三郎・熊野正道（編） 1991 「日本古墳大辞典」 東京堂出版  
大塚初重・吉村武彦 2003 『古墳時代の日本列島』 青木書店  
置田雅昭 1977 「初期の円筒埴輪」『考古学雑誌』63-3 日本国考古学会  
櫻原考古学研究所 2000 「權威の象徴—古墳時代の威儀具」  
川西宏幸 1978 「円筒埴輪論」『考古学雑誌』64-2 日本国考古学会  
小池 寛 1991 「古墳における木柱の樹立について」『京都府埋蔵文化財情報』第41号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター  
更埴市教育委員会 1992 『史跡 森將軍塚古墳』

小林健二 1993 「外來系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

近藤義郎(編) 1992 「前方後円墳集成」(近畿編)(中部編) 山川出版社

近藤義郎(編) 1992 「前方後円墳集成」(関東・東北編) 山川出版社

白石太一郎 1990 「古墳とヤマト政権」文芸春秋

高橋美久二 1991 「木製の埴輪」とその起源「古代の日本と東アジア」小学館

寺沢 純 2000 「王権誕生」日本の歴史第02巻 講談社

東京新聞 2000 「大古墳展 ヤマト王権と古墳の鏡」

橋本博文 1980 「甲斐の円筒埴輪」「丘陵」第8号 甲斐丘陵考古学研究会

能登川町教育委員会 「神郷亀塚古墳」

土生田純之 1991 「古墳における儀礼的研究—木柱をめぐって—」『九州文化史研究所紀要』36 九州大学文学部

福井県立若狭歴史民俗資料館 1993 「上之塚古墳発掘調査概報」「若狭歴民だより」第3号

宮澤公雄 「甲斐曾根丘陵における古墳時代前半期の様相—東山・米倉山地域の再検討を通して—」『山梨考古学論集』Ⅲ 山梨県考古学協会

山梨県 1998 「山梨県史」資料編1 原始・古代1

山梨県 1999 「山梨県史」資料編2 原始・古代2

山梨県立考古博物館 1986 「古代甲斐国と畿内王権」

雄山閣出版 2005 「季刊考古学」第90号

雄山閣出版 1995 「季刊考古学」第52号

### 報告書抄録

ふりがな	くにしていしけきょうしづかこふんつけたりまるやまづかこふん						
書名	国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳						
副題	史跡整備事業に伴う平成16年度発掘調査概要報告書						
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第228集						
著者	森原 明廣・森屋 文子						
発行者	山梨県教育委員会						
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 055-266-3016						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
ちょうしづかこふん	やまなしけん ひがしやつしろぐん なかみちまち しもぞね	1932620	35° 35° 32°	138° 34° 41°	2004年 9月21日 ~11月5日 2005年 1月11日 ~2月5日	650	史跡整備事業
桃子塚古墳	山梨県 東八代郡 中道町 下曾根						

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桃子塚古墳	古墳	古墳	墳丘 突出部 墳端テラス 周溝 周溝区画 堤防段状の周溝底面 木柱埋設土坑	埴輪 (円筒・朝顔形・壺形) ・土器 (S字口縁台付甕他) ・本製品 (木柱、有孔円盤状木製品、 刀劍状木製品、棒状木製品、 ヘラ状木製品、火葬板ほか) ・自然遺物 (樹木・種子・昆虫化石他)	全長169mの前方後円墳の 周溝範囲確認調査

〔表紙写真〕 第10号トレンチ南拡張区 出土木製品群  
〔裏表紙写真〕 銚子塚古墳全景（左上）  
第8号トレンチ調査風景（右上）  
第10号トレンチ出土の木柱（左下）  
第6-1号トレンチ検出の突出部（右下）

---

## 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第228集

### くにしせきちょうしづかこふんつけたりまるやまづかこふん 国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳

— 史跡整備事業に伴う平成16年度発掘調査概要報告書 —

平成17年3月25日 印刷

平成17年3月31日 発行

---

編	集	山梨県埋蔵文化財センター
		〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923
		TEL 055 (266) 3016
		maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp
発	行	山梨県教育委員会
印	刷	株式会社 少国民社
		〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-7-24
		TEL 055 (266) 2125

---

Archaeological Center of Yamanashi Prefecture  
Archaeological Research Papers No.228



A National Designation Historic Site in Japan  
Choshizuka Tumulus with Maruyamazuka Tumulus  
A Preliminary Report of an Excavation for Presentation of a Historic Sites  
:2004 to 2005